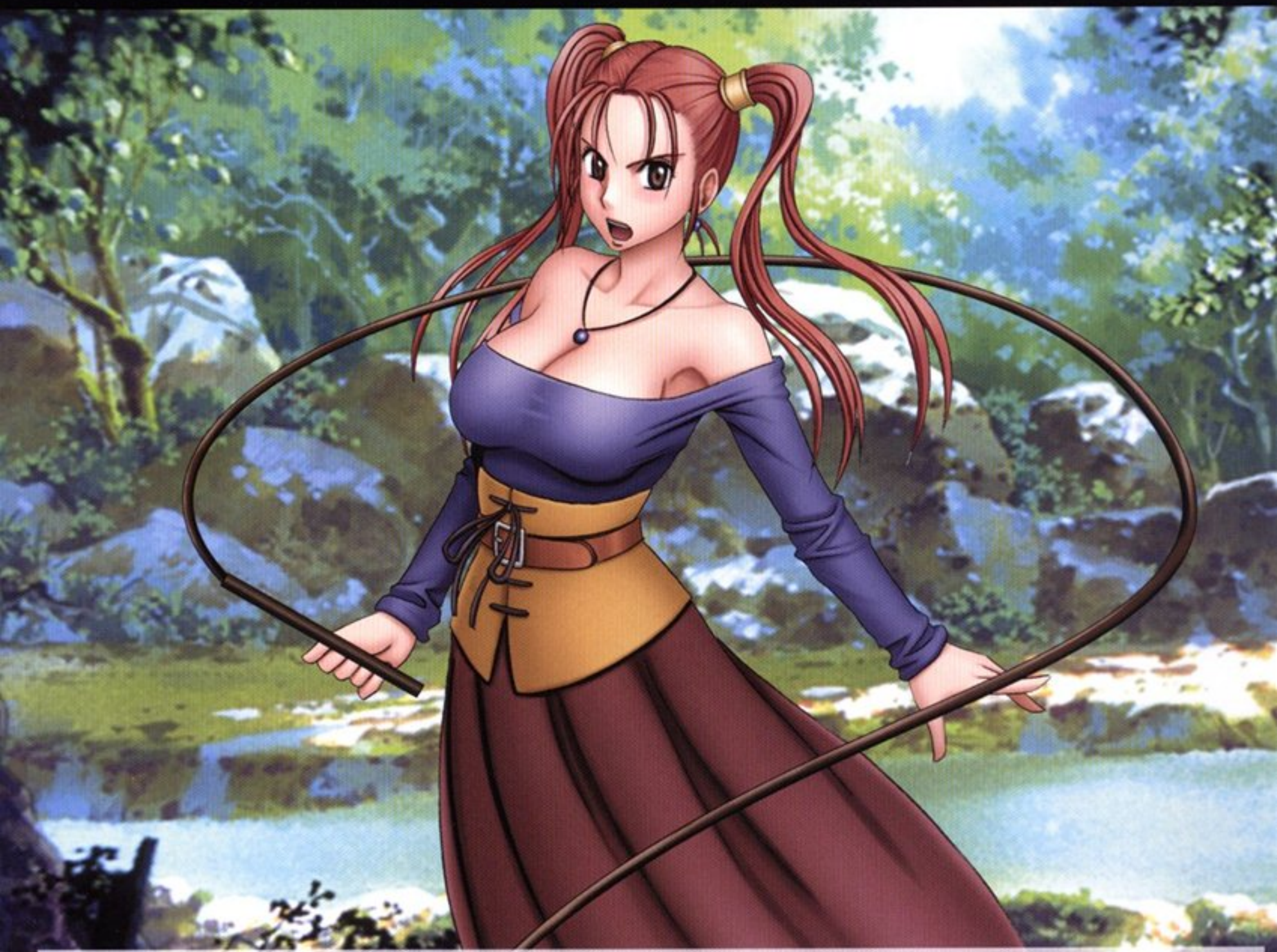
DQディザイア　フルカラー同人誌版
成人向
コミック

ゼシカ編



「あんたがゼシカ・アルバートだな」
「……？」
名前を呼ばれたゼシカが振り向くとひとりの男が立っていた。
「誰？」
見覚えはないし、声にも聞き覚えはなかった。
男は怪訝そうな表情のゼシカを上から下までじっくりと眺める。
「確認した。どうやら本人のようだ」
男がつぶやくと同時に、周囲の気配が一気にふくれあがる。
「！？」
いつの間に囲まれていたのか――。十人近い男たちが姿をあらわした。
皆それなり以上の使い手のようで、油断なくゼシカの挙動を見ている。
「何なのあなたたちは…！」
「ある人の依頼でな…悪いけどアンタにはしばらく眠ってもらうぜ」
「……ッ！」
男たちの包囲の距離がじりじりと狭まる。
ゼシカは圧倒的に不利な態勢であることは理解しながらも身構えた。
「逃がすなよ……弄ぶのはいいが、傷はできるだけ少なくな」
指示がゼシカの耳にもはっきりと聞こえる。
わざと聞こえるように言っているのだろう。
（完全になめられてるわね……）

戦いに敗れたゼシカ

「挿入された瞬間からイッてんじゃねぇか？この変態女」
「そ…そんなことは…ッ！はっ！はあああう！
「悔しかったらせめて声くらいガマンしてみろよ　ほら」
「はああう！　んっ…！くっ…ッ！　ッ！　ああああっ！
「ハハハ！もう全然ガマンできてないじゃねぇか！」
「今からお前は変態貴族たちのオモチャになるんだ　変態女なお前にはピッタリだな」
(そ…そんなっ！ダメッ！そんなの…！　何とか…何とか逃げないと…！ダメなのに…！
ああっ！　もう…！　い…イクッ！)
「ああああああああっ！」

戦いに敗れ、陵辱されつくしたゼシカは、消耗しきって気を失っていた。
男たちはゼシカを連れ、人里はなれた場所にひっそりと建っている館へと連れ込む。
その館は特殊な趣味をもった貴族たちが集まる“紳士の社交場”だった。
以前リーザス村を訪れた貴族のひとりが、ひそかにゼシカに目をつけていたのだ。
「上出来です。思ったよりも時間はかかったようですが……」
「なに、けっこうなじゃじゃ馬でして。それで、報酬は？」
「あちらに用意してあります。受け取ったらさっさと立ち去りなさい……ただし、この館のことは」
「一切他言無用ですね？　わかってますって……へへ、またよろしく頼みますぜ」
言葉尻や態度に相手への嫌悪をのぞかせながら、ゼシカを襲った男たちは館を後にした。
残されたのは数人の貴族とゼシカ――。
貴族たちはさっそく宴の準備を始める。
「う……」
ゼシカは冷たい感触に目を覚ました。
（ここは……）
目の前に光がちらちらときらめく。その光に手で触れるとまた冷たい感触――。
（ガラス……？）
どうやら目に入ってきた光はガラスが明かりを反射したものらしかった。手で叩くと重い音とどっしりとした量感。
次第に意識もはっきりしてきて、ゼシカは自分が大きなガラスの箱のなかに閉じ込められていることに気付く。
同時に――たくさんの“目”が自分を見ていることにも気づいた。
（な、何なの、これ……！？）
透明なガラスの箱に閉じ込められたゼシカの周囲には、十数人の男たちがいた。
ゼシカは自分の置かれている状況が改めてわからなくなり、目を白黒させてあたりを見回す。
男たちは皆椅子に座り、ニヤニヤと笑っている。椅子の他にはテーブルも設えられており、その上にはぶどう酒の瓶があった。
ある者はグラスを手に持ち、ぶどう酒を飲みながらゼシカの様子を見ている。
（これ……私が見世物みたいになってる……！？）
　ガタッ――！
やっと状況を理解し始めたところで大きな音が鳴った。
「きゃ！？」
ガラスの床の一部が開き――何かが這い出てくる。
「……ッ！」
言葉をなくすゼシカの脚に、這い出てきた何かが触手を絡みつかせる。

「い、いや！　離して！」
床から這い出てきたのは触手の塊のような生物だった。
うぞうぞとぬめる触手を蠢かせながら、ゼシカを自らのほうへと引っ張る。
「やあ！　いやぁっ！」
どれだけ暴れてもぬめった軟体には効果がない。
ゼシカはどんどん触手に絡みとられ、四肢を拘束されてしまう。
「くぅ……！」
下半身がほとんど触手のなかに埋まった。気味の悪い粘液で下着まで濡れてしまう。
「はぁ、はぁ、ぅう……っ」
必死に身体をばたつかせるがどうにもならない。触手の動きが徐々に活発になっていく。
「おお……！」
「たまりませんな」
貴族たちは、ゼシカの四肢が触手に絡め取られていく様子を喜んで見守っていた。
美酒に舌鼓を打ちながら、少女が触手生物に蹂躙されるさまを見るのが
彼らにとって何よりの娯楽なのだ。
「……ッ！」
ゼシカも自分が変態的な性欲の対象になっていることにやっと気付く。
このガラスの牢獄も気味の悪い生き物も好事家の貴族たちがわざわざ用意したもの。
「く……あ、はぁ……！」
触手はゼシカの身体を包み、肌の上を自由に這い回る。
「うあ、きゃ、いやあ！」
原生的な生物にしか見えない触手だが人間をどう扱えばいいのかは心得ているようだった。
ゼシカの服の胸元を引っ張り、豊満な双丘を露出させる。
「やめなさいよ、このエロ触手！」
慌ててゼシカが胸元をおさえ、触手を引き剥がそうとする。
だがぬめる表皮で手が滑り、うまく抑えることができない。
「これはなかなか……」
「ははは！　面白い趣向ですな」
貴族たちはその様を見て笑い、ぶどう酒をあおる。
「く……！」
ゼシカは頬を赤くしてうつむいた。
必死に抵抗しても見世物になるだけ――そんな屈辱感と恥辱が胸に迫る。
（最低……！）
ガラス越しに貴族たちを睨む。
だが彼らはニヤニヤと笑っているだけで、全く動じた様子はなかった。

「きゃ、ああ！　いや……やあぁっ！」
ついに完全に胸が露出する。ゼシカの両腕は触手に絡め取られ、ほとんど身動きできない。
さらに――あらわになった胸に筒状の触手が吸いついてくる。
「ん……あぁぁ！」
ゼシカの豊満な胸に嬉しそうに絡みつき、吸盤のようにすっぽりと先端を包む触手。
「ひ……あ、はぁ、いや……す、吸ってる！？」
ただ吸うだけではなく、脈拍に合わせるかのように強弱をつけている。
ぎりぎり痛みを感じない程度の強さでゼシカの性感を徐々に引き出していく。
「あぅ……ん、はああん！」
触手に弄ばれながら、ゼシカは貴族たちに完全に見下されているのを感じていた。
「く……うぅ、はぁ、ああ……！」
村娘のゼシカは貴族たちが下々のものを人間扱いしないことはよく心得ている。
だが、こんな状況でもそれが変わらないことは何ともいえず屈辱的だった。
懸命に逃げる手段を探し、もがく自分の姿が見世物になっている。
けれどそれでも諦めてしまうわけにはいかない。
貴族たちを喜ばせるのをわかっていながらもあがくしかない。
「う、あ、やぁ！」
ゼシカの心がある程度弱ったのを察したのか、触手の形状が変化した。
乳首を吸引するだけだった筒状の触手の内壁に、極小の突起が生えてくる。
「あく……はぁ、あ、うぅ……！」
痛いようなかゆいようなくすぐったいような、絶妙な刺激がゼシカの乳首を包んだ。
吸いつきながら、ざらざらの襞が乳首をこねまわし、右に左に摩擦する。
「うぅ、ふぅ……く、はぁ、あぐ……あ、はぁあ！」
思わずあられもない声をあげるゼシカ。
それでも貴族たちは穏やかに談笑しながらその痴態を見ている。
「う……あぅ……う、ぁ、うぅうっ……」
見られている羞恥と、見下されているという屈辱が同時にゼシカを責める。
（もう、だめ……）
抵抗しても声を我慢しても、何をしても“見世物”に過ぎない。
そんな絶望感が一瞬、ゼシカの心を覆う。触手はそれを見逃さずに感応した。
「ひっ！？」
わずかな心の隙につけこみ、胸を激しく吸引する――。
「あ、はぁ、あああぁぁぁっ！！」
ゼシカの四肢にぎゅっと力がこもった。がくがくと身体を震わせて喘ぐ。
「あ――く、は、あ、はぁ、はぁ、はぁ……！」
ごく軽いものではあるが――ゼシカは胸への刺激だけで絶頂に達してしまっていた。

「あ……はぁ、はぁ、う……く、あ……はぁ……」
ゼシカは消耗しきっていた。触手に弄ばれ始めてから既に数時間が経過している。
貴族たちは相変わらず酒を飲みながら談笑し、ゲームに興じている面々もいた。
喘ぎ声があがれば見世物にちらりと視線を移し、悠々と観て楽しむ。
「あく……ん、はぁ、あぅ……」
(こんなの……ひどすぎる……)
触手は飽きることなくゼシカを蹂躙し、確実に絶頂へと導く。
「あぅ……んはぁ、はぁ、ああ……や、あ……ああっ!」
この数時間の間にもう何度イカされたのかもわからない。
「んぐ、はぁ、ぁむ……ん、はぁ、ああ……!」
口のなかも触手に犯され、強制的に酸欠状態にされる。
朦朧とする意識が理性のくびきをゆるめ、簡単に絶頂を引き出されてしまう――。
「あ――く、はぁ、ん、んむ……! はぁ、あああぁぁぁぁっ!!」
口の端からだらだらと唾液を垂らしながらゼシカはまた絶頂に達した。
「おっ?またイッたんじゃないですか?」
「そのようですね」
何人かの貴族がゼシカに視線を向ける。
「や……いやあ……!」
ゼシカが弱々しく身をよじり、裸体を隠そうとする。
だが体力は既に消耗しきっていて弱々しく肩が動くだけだった。
一度イカせた後は敏感な場所には触れない。
ゆっくりと膣口や胸を刺激し、絶頂の余韻を長引かせる。
「あ……ぅ……」
そしてゼシカの意識が落ち着いてきた頃に、またクリトリスや乳首に触れる。
「あく……ん、はぁ、ああ……!」
触手がクリトリスを優しく刺激しつつ、膣への抽挿を再開する。
先程からずっと、ごく浅い場所への刺激とクリトリスの快感で
何度もイカされてしまっていた。
おかげでもう、少し抜き挿しされただけでも条件反射で感じてしまう。
膣内の快感とクリトリスの快感が混ざり合い、
挿入だけでありえないほど神経が高ぶるようになっていた。
「あ、やぁ、あ、ぅあ……また、やだ、あああっ!」
疲れを知らない触手の愛撫がゼシカの肉体を徐々に変化させ、作りかえる。

――解放は突然だった。

「あ……」

しばらく触手に弄ばれた後、完全に体力を消耗しきったところでガラスの箱が開く。

触手生物も名残りおしそうにしながら、ガラス床の下へと帰っていく。

「さて、そろそろ仕上がった頃でしょう」

「ふむ……よく見れば顔立ちもなかなかだ」

数人の貴族が立ち上がってゼシカに近づいてくる。

「な……何なの、あなたたちは……」

「まずはこの胸を味わってみましょうか」

息も絶えだえに言ったゼシカの言葉は全く意に介さず、二人の貴族が胸に吸い付いた。

「ふぁ……！　あ、はぁ、や……め……く、ぅう！」

ゼシカが動けないのをいいことに、赤子のように胸にすいつく男たち。

その光景は一種異様なものだった。

ちゅぱちゅぱとわざとらしく音をたて、自分よりも年下の少女の乳房を弄ぶ。

「あ……ひぅ、ん、はぅ……ん、んんっ！」

触手にさんざん弄ばれ、じんじんと痺れる胸は男たちの愛撫で簡単に高ぶってしまう。

肌が桜色に染まり、声にもどこか媚が含まれている。

「どうです？　田舎のお嬢様もなかなかのものでしょう？」

「カラダは成熟してるのに少女の様相も残っている雰囲気がたまりませんな」

数人の貴族がしたり顔で品評する。

そのなかのひとりは、ゼシカにも見覚えがあった。

（あいつ……確か、リーザス村で……）

「おや？　私のことを覚えていましたか。まあ当然ですね。

私ほど人目を引く容姿であれば、田舎娘には――」

「ふざけ……ない、で……！　誰があんたなんか……！」

貴族たちのなかでもその男はリーダー格なのかもしれない。

彼が指示すると、胸に吸い付いた男たちが乳首に軽く歯を立てながら強くもみしだく。

「ひぁ、はぁ、んん……！　あ、ふぁあ、いやあっ！」

「フフフ……小娘風情が私に偉そうな口をきくものではありませんよ」

「あぅ……く、うぅ！」

こんな男にいいようにされているなんて、とゼシカは歯噛みする。

けれどまだ身体には全く力が入らない。

ただ男たちに胸を吸われ、気に入らない相手に見下ろされているしかない状況だった。

今のゼシカにできるのは睨みつけることくらい――。

「気に入らない目ですね」

「ああぁっ、はぁ、ふぁあぁっ！」

だが男が一言つぶやけば、胸を強く刺激されてそれすらもできなくなる。

「それにしても豊かで形も良い乳房ですね」
「この胸、使わない手はないですな」
男たちは何事かを話してうなずき合い、ゼシカを見下ろす。
そしてひとりがいきなり下半身を露出させたかと思うとゼシカに馬乗りになった。
「う……あ……く、うぅ……な……なに……？」
「パイズリというやつですよ」
単語の意味はわからない。
けれど、自分が途方もなく屈辱的な行為の対象になっていることはわかった。
男はゼシカの豊満な胸をわしづかみにし、前後させて陰茎をしごく。
「あぁ、はぁ、やあ……！　こんなの……ひど、うぅ、ああっ！」
ゼシカが口を開こうとすると乳首をつまみあげて言葉を途切れさせ、屈服させた。
肌理の細かい健康的な皮膚は汗と触手の粘液で濡れ、
男にとっては極上のクッションになっていた。
そして何より柔らかな胸で挟まれる感触。
「どうですか？　自分のカラダをオナホールのように扱われる屈辱感は」
「う……く、うぅ……」
「答えなさい！」
「ひゃぅうん！」
歯を食いしばって抵抗の意思を見せようとするゼシカの乳首を男がつまみあげた。
桜色だったそこは度重なる刺激や乱暴ですっかり赤く充血してしまっている。
「この調子だと初々しいここもすぐに売女のような濃い色になってしまいそうですね」
馬乗りになった男が指の間に乳首を強く挟む。
そのまま強く胸全体をつかみ、激しく動かした。
「ああっ、ひぅ、ん、はぁ、あぐ……痛っ、うぅ、ああ……！」
「あなたたち平民は私たち貴族の道具に過ぎないのですよ……
道具なら道具らしく、おとなしく使われていなさい」
「くああっ！　いや、ちが……う、私たちは、そんな……
どうぐ、なんかじゃ……あ、はぁああ！　うぅ、んぅ！」
必死で口答えをしつつも、ゼシカの意識は半ば朦朧としていた。
（胸が……熱くて……頭が、ぼーっとして……！）
「あ……はぁ、ん、はぅ……ううん、ひぅ……」
ゼシカの様子が徐々に変化していくのを貴族たちも見抜いた。
ニヤニヤとした笑いを顔面に貼りつけながら胸を蹂躙し、冷たい視線を浴びせる。
いつしかゼシカの秘所からは透明な愛液が流れ出て、太ももにまで伝っている。
きらきらと輝くその軌跡は照明にあてられて淫靡に光り、貴族たちの興奮を煽った。

一人の貴族が前に進みでて、ゼシカの秘所に触れた。
「あ――」
十分に濡れたそこは淫らな水音をたてて男の指をすんなりと受け入れる。
くちゅ、ちゅ、くち――。
指を上下させると陰唇が柔らかく形を変化させるのが周囲にもはっきりと見えた。
「あ、ひ、ああ……ぅう、んぁあ！」
ゼシカの反応は男が思っていたよりもずっと良かった。
男がなかなかのテクニシャンなこともあり、ゼシカは容易にあられもない声をあげてしまう。
歯を食いしばって我慢しようとしても、パイズリしている男の乱暴な刺激と繊細な股間への刺激、その両方が下腹の奥にきゅんきゅんと響いてくる。
「ひぁ、ああ、はぅ……ん、んふぁあ！」
「いい声でなきますね」
ゼシカの反応の良さに男たちも格段に盛り上がる。
胸をオナホールのように使われる哀れな姿がサディスティックな情欲を煽る。
そして、それでも股間に触れられると喘ぎ声をあげてしまう“女の性”が男の獣欲を引き出す。
（いや……いやなのに、どうして……！）
触手生物から解放されてしばらくたち、いくらかは体力が戻ってきている。
だが、せっかくの力を逃げるために使うことはできなかった。
「あぅう！　ん、くは……はぁ、はぁ、はぁ……！」
男に敏感な場所を刺激され、快楽にいきむ。そのためだけに体力を使ってしまうのだった。
「はぁ、ひ、やあ……！　い、いい……いやなのに……きもち、い……あ、はぁ、あああぁっ！」
「遠慮することはありません。好きなだけ感じてしまいなさい。素直になればいいんですよ……」
（あそこ、触られながら、胸も……だめ、おかしくなる……！）
ちかちかとした白い光が頭のなかで明滅する。
「ここは正直ですね」
「！？　ひ――あああぁぁあぁっ！！」
男が指で弾いたのは、勃起して自己主張したクリトリスだった。
「あふ、ひ、はぁ、ああ……ぅぅう、んんぅぅう！」
なおも男が指の腹でこするとがくがくとゼシカの身体が震えた。
歯の根があわず、頭を激しく左右に振る様子はパイズリ中の男をも興奮させる。
「ああ、はぅ……あ、はぁ、ああ……ひぅ、んぅう！」
男の指がクリトリスを刺激しながら、膣の入り口をこねる。
「あ、はぁ、ああぁっ！」
ぶしっ――。
潮のしぶきが一度だけ勢いよく吹き出して男の腕を濡らす。
「……もう我慢できません」

男は下半身を露出させると濡れそぼったゼシカの陰唇にペニスを押し付けた。
「あ――ああ、やあ、ああぅ……！」
そのままゆっくりと腰を押し進め、挿入する。
「ふぁあ、ああ、んはああ！」
パイズリされながら膣内にもペニスを押し入れられ、ゼシカは二人の男に同時に犯される。
（太い……！）
男のものは触手よりも径が大きく、敏感になったゼシカの膣口を押し広げて刺激した。
挿入しながら同時にクリトリスを触ることも忘れない。
「あひ――ふぁあ、ん、は、あ、だめ……だめぇ！　そこは、もう……いや、やあ！」
巧みに指先を使って勃起したそれをこすりあげ、ゆっくりと腰を前後させる。
ゼシカの体温が上昇して汗ばむ。
パイズリしている男も包まれるあたたかさと汗の湿り気によって快感が増幅された。
「なかなか無いほどの上物ですね」
「ええ、まったく」
周囲で見ている貴族の視線にもだんだんと本気の熱が篭り始めていた。
（見られてる……っ）
いつしか卓に置かれた酒もそっちのけで、犯されるゼシカの姿を堪能する。
触手生物に弄ばれていたときの冷たい視線とは対照的な、欲望のこもった視線。
だが依然としてゼシカを人間扱いしていないことには変わりない。
単に“見世物”から“肉奴隷”へと変化しただけなのだ。
前者はゼシカの屈辱感を煽った。
そして後者は今、ゼシカのマゾの快楽を引き出そうとしている。
「おお……締まる締まる！」
ぎゅっ、ぎゅっと段をつけるようにゼシカの入り口が男のものを絞り上げた。
それでいて奥のほうはまだ未開発でややかたく、控えめにペニスに絡みつく。
触手生物によっていびつな快楽を与えられてしまったゼシカのそこは、
男に今までに無い感触を味わわせる。
「く……こんなに出し入れするのが楽しい穴は久しぶりですよ」
「はぁ、あぅ、く……や、ああっ！」
膣内から抜ける直前まで引き出せば、商売女のような締め付け。
逆に奥にまで突っ込んで固定すれば、まぎれもなく少女の青い果実の感触だった。
「ひああ、はぁ、うぅん、いや……ああ、はぁ、んぅ、ん、ん、ふぁ、あぅ……！」
男のものが膣内でひとまわり大きくなる。
襞がより強く圧迫され、行き場をうしなった愛液が結合部からどんどん溢れ出す。
「ん、ひぅ……ん、くぅん！」
クリトリスも完全に勃起して固くしこり、男の指先に独特の弾力を返した。

「たまりません……そろそろ限界ですよ」
「こっちも一度出しておきますか」
パイズリ中の男と挿入している男が息を合わせ、同時にゼシカの身体を激しく蹂躙する。
最奥を強く突いて身体が揺れると、前の男が乳首を強くつまみあげる。クリトリスへの刺激であえぎ声があがれば、その口に亀頭の先端の先走りをなすりつけた。
「ひああ、はぁ、い……あ、あ、あ、はぁ、あぅう！」
もうゼシカには右も左もわからない。
二人の男によって揺れる身体は水面に揺れる木の葉のように無力だった。かろうじて握った拳がまだ抵抗の意思を表している。けれど、腕が上がることはない。
体力は既に底をつき、かろうじて精神力が残っているだけだった。それも今まさに砕かれようとしている――。
「く……出そうだ……さあ、どこに出して欲しいですか？」
「あ、いや……なかは……！　そ、そとに……！」
「ククク……それはできませんね！　われわれ貴族は田舎娘の懇願などには聞く耳を持っていません……自分の立場を知りなさい！」
男がぐっと腰を前に突き出し、結合部を密着させる。
「ひ……いやあ、やああ！」
ゼシカは身動きできずにその瞬間をただ待つほかなかった。
「おお……！」
どぷ、どぐ、びゅぶ――！

「あ――はあ、うあああああああああああ！！」

悲痛な絶頂。膣襞を精一杯押し広げられ、白濁をおもいきり放出されてゼシカはオーガズムに達してしまっていた。
がくがくと激しく身体が震え、ぬるりとした汗がどっと吹き出す。その感触とゼシカの表情で、パイズリしていた男も絶頂に達した。
びゅぶ、びゅるる、びゅ――！
「あ、いや、熱……！　はぁ、いやあ！」
吐き出された大量の精液が顔にも降り注ぐ。濃い白に濁ったそれは重量感をもち、ぱたぱたと音をたてて顔面の皮膚ではじけた。
「あ……うぅ、はぁ、うぷ……んはぁ、ん……！」
鼻下や口にべったりとついた精液から独特の臭いがただよい、ゼシカの嗅覚をも犯した。
「う……あ、はぁ、はぁ……」
「ふぅ……。こんなに心地良い胸は久しぶりでしたよ」
「こちらも最高でした。やはりうぶな娘への中出しはたまりませんね……フフフ、高貴な種を受け取ったのです。悲しむ必要はどこにもありませんよ」
「そうですね。このなかの誰かに気に入られ、妾として置いてもらえれば食うには困りませんからね」
「あ……は、あ……ぅ……」
ずる――。
挿入していた男が立ち上がると、結合部から精液と愛液が混ざった液体が大量にあふれだした。
（こんなに……出された……）
「さて、宴はまだまだ続きます。次の催しにご案内しましょう！」
貴族たちは着衣を整えると別室へと急ぐ。もうゼシカに注意を払っているものはいない。部屋にひとり取り残され、ゼシカは絶望感と共に意識を失った――。

ビアンカ編

先日、匿名の封書がビアンカのもとに届いた。
なかには一通の手紙が入っており、
大事な届けものがあるから森で落ちあいたいと記載されていた。
怪しいのは承知で最初は無視しようと思ったビアンカだが――
結局こうして指定された場所に来てしまった。
(どこかで見覚えのある筆跡なのよね……)
不審に思いつつも何かが心のなかでひっかかったのだ。
(それにしても本当に何もない場所……本当にこんなところに来るのかしら)
約束の場所は森のかなり奥で、モンスターがあらわれても不思議ではない。
木が鬱蒼としげって見通しはかなり悪く、足場もかなり悪い。
もう随分前からでこぼこのけもの道を歩いている。
人の気配はなかったが、しばらく辺りを散策してみることにした。
(やっぱりただのいたずらだったのかしら……)
ゆっくりと時間をかけ、注意深く歩いていたつもりだが、
周囲には植物以外のものは何も見つからない。
さすがに帰ろうとしたところで――。
「!?」
目の前の木陰から唐突に男がひとり現れた。
「お待たせしました」
「あ……あなたなの? この手紙は……」
「ええ。その手紙の差出人から依頼を受けたものです」
「……」
男は明らかに怪しげな風体だ。
封書と手紙はしっかりとした体裁を保っていただけに、
目の前にいる男とのギャップが信じられない。
「一緒に来てもらえますかね?」
「……イヤだといったら?」
ビアンカが武器を構えると、男は笑う。
「おとなしくしたほうが身のためですよ……。こちらも傷つけたくはないんです」
言葉と共に、周囲の木陰から数人の男たちが現れた。
「……!」
気がつけばビアンカはすっかり囲まれてしまっている。
(全然気づかなかったなんて……)
ビアンカの表情に明らかな焦りと動揺が走る。
けれど、構えた武器を下ろすことはしなかった。
「やれやれ。もう少し聞き分けがいい方だと思っていたんだがな」
男たちがじわりと包囲を狭めてくる――。

ビアンカは戦いに敗れた

「へへッ　こんな美人とやれるなんてな」

「いやっ…！おろして！

ビクッ

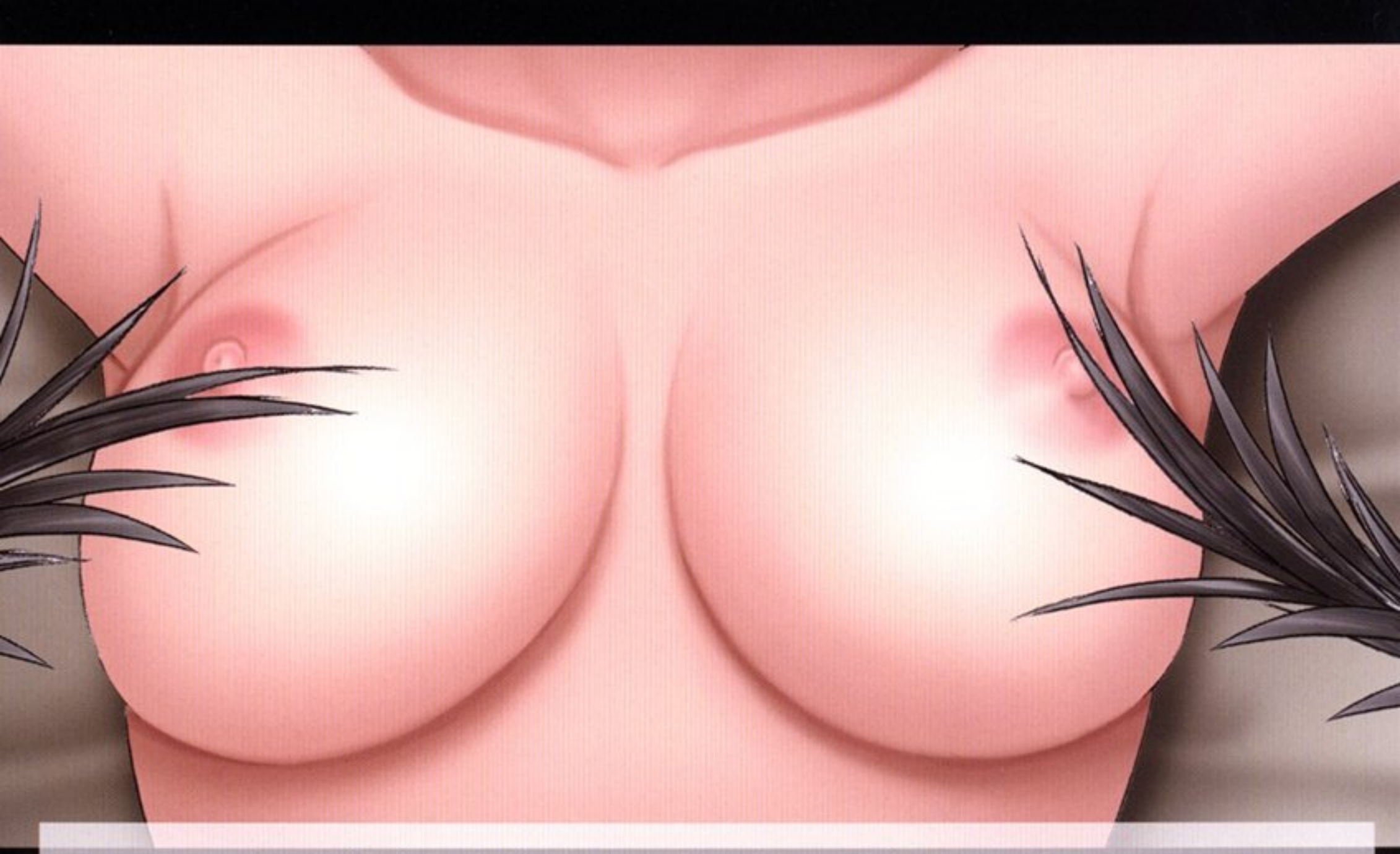
あぁッ!!

グッ

ビクビク
あぁぁぁ!!!

「う……」
頭がずきずきと痛み、全身がだるい。ビアンカは眉をしかめながらなんとか目を開ける。
「……!」
まず視界に入ってきたのは、拘束されている自分の手足だった。
だが、意外だったのは部屋の設備だ。
部屋のつくり自体は明るく、調度品も高価そうだ。
ビアンカが寝かされているベッドの感触も柔らかく、シーツの生地も肌に心地良い。
「気が付いたようですね」
「……!」
男があらわれ、きざな仕草でビアンカのおとがいを持ち上げた。
男は素肌の上にバスローブのようなものを羽織り、顔には仮面をつけていた。
「あなたたちは――」
「……とある方から依頼を受けましてね。
あなたを人前に出ることが恥ずかしくなるくらい淫乱なメスブタに変えて欲しいと」
「なんですって!?」
「話はうかがっていましたが……素晴らしい肉体をお持ちだ。
あまたの女を見てきましたが、これほどのものにはなかなかお目にかかれませんよ」
男は興奮を押し殺した声で言い、ビアンカの肌に触れる。
「う……」
ビクリとビアンカが身体を震わせると、楽しげに仮面の下の目を細めた。
「おまけに感度も良いようですね……これは私たちとしてもやりがいがありますよ」
男は羽織っていたものを脱ぎ、自らの肉体をビアンカの眼前で露出させた。
ビアンカは反射的に目をそらしていた。
「おまけにその初々しい仕草……実にそそりますね」
「あ……!」
「ふむ……肌の手ざわりも最高ですよ」
ビアンカの張りがあって健康そうな肌に男が嬉しそうに触れる。
「う……く……っ」
仮面の下で男はビアンカの表情を観察した。
ただ肌を触っているだけに見えるが、注意深く感度の良い場所を探している。
「んぁ……はぁ、うう……」
「初めに言っておきますが……私たちは性のプロフェッショナルです。
上流階級の有閑マダムの欲求不満を解消させることを生業としています」
「え……!?」
ビアンカにはにわかに信じられない。
そんな馬鹿げた生業があるなんて――

男たちは手に手に羽根を持ち、ビアンカに群がる。
「ちょ……な、何なの、それ……やめ、ふぁあ！」
羽根が次々とビアンカの肌に触れた。
羽根の微妙な感覚、くすぐったさはじわじわとした快楽を生んだ。
「うく……はぁ、んぅ……ん、ふぅ、はぅ……！」
ビアンカの反応を見て男たちは確実な手ごたえを感じていた。
（耐えなきゃ……！）
たとえ身体は反応していても、ビアンカの精神が屈する様子は無い。
「ふむ。なかなか強情ですね。まあ良いでしょう……
何しろこちらには時間がたっぷりとありますからね」
男は余裕の笑みを浮かべ、羽根での愛撫を継続する。
「くぅ……！」
（でも……あきらめちゃダメ……！）
ビアンカが歯を食いしばり、男たちを睨みつける。
「うう……く、はぁ……う……ぅ」
羽根が胸の先端に触れるとさすがに声が漏れた。
最初はただ羽根が触れているくすぐったさだけだったが、
だんだんピリピリと痺れるような刺激があらわれる。
「ぁ……はぁ、うぅ……ん！」
くすぐったさも募るとかゆみにも変化する。
そして敏感な場所に現れたかゆみは、熱にも痺れにも変わっていく。
「はぁ、ぅ……ぁ、や、あぅ……！」
（何……何なの、この感覚……！）
大の字で拘束されてしまって、身体に力の入れどころもない。
そのせいでビアンカの肌の感覚は均一に敏感になる。
さらに羽根の刺激で神経を高ぶらされ、
次第に空気の流れだけで勝手に肌がびりびりと反応しだす。
「あぅ……く、はぁ、あぅ……！」
ビアンカはたまらず目をあけた。
「やはりあなたのカラダはそうとう敏感なようですね」
「く……！」
男が顔を近づけ、ビアンカの耳元でささやく。
それだけでビアンカの身体がびくりと震えた。
男のささやき声で耳朶を震わせられることすらも、
高ぶった神経が鋭く捉えてしまうのだ。
ビアンカはなんとか気を持ち直し、男をにらみつける。



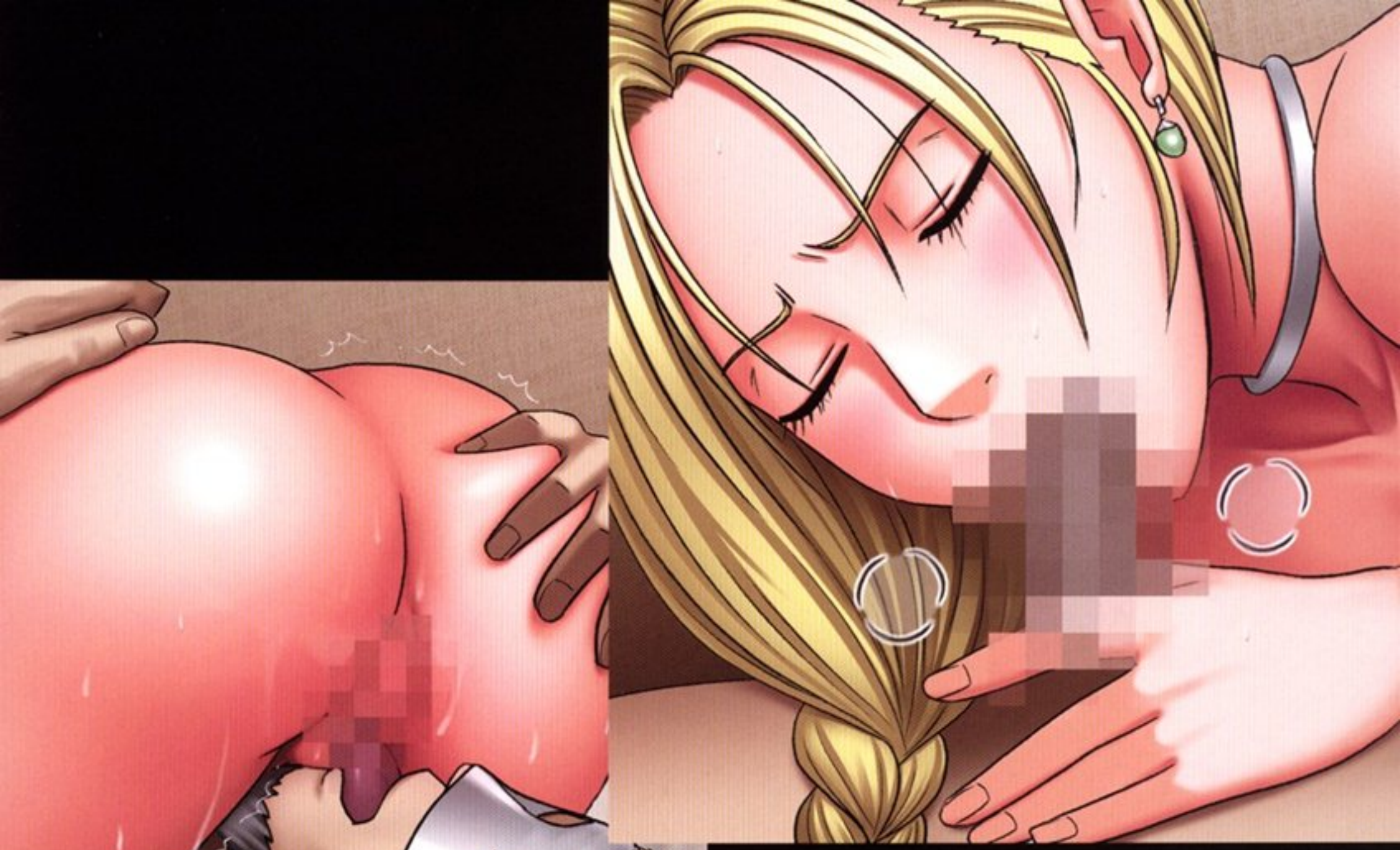
「なかなか気丈な方のようですね。いいでしょう、私たちのとっておきを差し上げます」
男は楽しげにビアンカの視線を受け流し、薬液のようなものが入った瓶を持ってこさせた。
手にもっている羽根をその瓶の中の液体に浸す。
とろとろと少し粘性のある薬液が羽根にまとわりついた。
「フフフ……これはいわゆる媚薬というやつでしてね」
「！？」
他の男も次々と羽根を薬液に浸す。
「どうぞ、遠慮せずに楽しんでください」
男は笑い、液体をビアンカの肌に垂らした。
「あ……！」
粘り気のある冷たい感触。
表面張力でとろりとした円を作り、徐々に広がっていく。
「う……くあ……！」
また全ての羽根がビアンカの肉体に群がり、思い思いの場所に媚薬を塗りつける。
「つめた……ひ、ぅ、あ……！」
敏感になって火照った身体が媚薬の冷たさに驚く。
「うぅ……く、あ、んぅ……！」
「まずはここからですね」
「ひぁ！？」
男たちはビアンカの胸に羽根をもっていき、集中的に媚薬を垂らして塗りこんだ。
「あ、う……くぅ、ふぁあ！」
媚薬の効果は劇的だった。
最初は冷たさを感じていたのい、すぐに熱を感じるようになる。
クスリの成分がビアンカの神経の興奮を引き出し、感覚を逆立たせるかのように刺激する。
「あぅ……ぅ、んん、んはぁ！」
羽根が胸の先端をくすぐる。
柔らかいタッチで乳首を刺激するうちに、だんだんビアンカのそこが硬くなってきた。
「ふあ、ああ、あぃ……んぅう！」
羽根が触れるとこりこりとした弾力があるのがわかる。
やや血色もよくなって充血し、男たちにビアンカの興奮を伝えた。

「おや……胸だけで相当感じてるようですが？　イキそうではありませんか？」
「う……ば、バカなこと言わないで！　こんなの、全然、なんとも……く、うぅ！」
ビアンカが目を潤ませながらも強気に返す。
すると、男たちはさっと羽根を引いた。
「え――」
刺激が一気に消え、一瞬ビアンカは戸惑う。
「う……く、ぁ、はぁ……はぁ、はぁ……！」
そしてその数秒後、怒涛のように押し寄せる切なさ。
今までずっと与えられ続けてきた刺激がなくなったのだ。
ただでさえ媚薬で神経が高ぶっているところに、この“空虚”は衝撃的だった。
「はぁ、ああ……はぁ、う……く、はぅ……！」
ビアンカは男たちが見下ろされながら、全身を細かく震えさせてしまう。
「カラダのほうはだいぶ素直になってきたようですね」
男が薄い笑みを浮かべる。
そのなかには、性技に悶えるビアンカを侮蔑するような意味合いが少なからずこめられていた。
「あぅ、う、くぅぅうん！」
男たちの愛撫がゆるやかに再開した。
羽根を駆使して絶妙なタッチで責めあげていく。
触れられているのかそうでないのかわからない、それくらいの刺激こそが
もっとも強く興奮を引き出す。
「ん、はぁ、ああ……！　ひ、ぅああ！」
ビアンカの声が大きくなり、全身が大きく震えると男たちは手を引く。
そして落ち着いた頃にまたゆっくりと愛撫が再開されるという形だった。
ビアンカが高ぶるペースを完全に把握して焦らすことに集中している。
（こんなの……カラダが、おかしくなる……！）
ビアンカの脚が時折ビクビクと震え、拘束具が耳障りに鳴った。
その音は男たちは当然、ビアンカ自身にも聞こえている。
「くぁ……！　はぁ、う……く……！」
反応を男たちに示してしまっているのが恥ずかしくてたまらず、手足に精一杯力を入れて我慢する。
だが――そうすると背筋は反り返り、脚をピンと伸ばしてしまう。
男たちにとってはその姿も欲望をそそるものだった。

「あ……はぁ、あ、う……はぁ、はぁ……」
ビアンカの意識は半ば以上朦朧とし始めている。
全身が敏感になりすぎて、体力の消耗が凄まじい。今度は男たちが直接に手を伸ばした。
「うあ……あ、かは、はぁ、ああ……んふぁ、はああ！」
直に触れるあたたかい感覚はビアンカに何ともいえない多幸感をもたらした。
「あひ、ん……はぁ、ああああ、はぁ……はぁ、んぁ……！」
「私たちの手が相当気に入ったようですね」
「や……あ、いや、ああ……！」
男のひとりが顔を近づけ、ビアンカの頬を舐め上げる。
「ひ……！」
ぬるりとした舌。生臭くあたたかい息。べっとりと塗りつけられた唾液。
（いや……いやなはず、なのに……！）
嫌悪感を抱かなければならないはずのその感触が何故かビアンカを高ぶらせる。
「あぅ……ん、く、うぅ、んふぁ……」
男はねっとりとした愛撫でビアンカの耳をねぶる。
別の男も胸に脚に手を伸ばし、性感帯を探した。
「あく、はぁ、あ、はあ……！」
ローションのぬるぬるとした光沢がビアンカの肌を包んで微妙な痺れを生んだ。
「あう、く……うぅ、はぁ、ああ……！」
（どうしてこんな風に……感じて……！）
頬を舌でぞろりとなめあげられる。
いっしか嫌悪を抱くどころか、もっとそうしていて欲しいと思うようになっていた。
「言ったでしょう？　私たちは性のプロです。
あなたが感じてしまっているのはクスリのせい……。仕方のないことなんですよ」
「くぅ……ん、はぅ……う、はぁ、んぅ……」
「そろそろ素直になってはいかがですか？　時間はたっぷりありますからね」
「う……あ、はぁ、いや……く、ん、く、うう……！」
ビアンカは朦朧としながらも首を振る。
「仕方のない人ですね」
呆れた口調で言う男だったが、口許には笑みが浮かんでいる。
他の男たちも同様で、久々に手応えのある“獲物”に夢中になった。
「ああ、はぁ……あぅ、く、うあ、やあ……！」
羽根で触られていたときよりもビアンカの乳首は硬くしこっており、
それが興奮の度合いを示していた。
男たちのねちっこい愛撫を受けて、ビアンカの性感はじわじわと高まっていく。

そうしてさんざん敏感にさせたところで、ついに男の指がビアンカの秘所に触れた。
「……ッ！？」
息を一気に吸い込んだ身体ががくんと跳ねあがる。
「……っあああああああああ！！」
反応は激烈だった。
たまりにたまっていた快楽が一気に解放されたかのように、頭の中が真っ白に染まる。
「どうです？　気持ちよくてたまらないでしょう」
「そ、そんなこと……あ、はぁ、あああっ！！！」
大雑把で繊細さのかけらもない乱暴な愛撫。だが、今のビアンカにはそのラフさが心地良い。
「ここがいいんですか？　それともここ？」
男の指がゆっくりと股間を這い回った。下着越しに陰唇を押し広げ、クリトリスの上をこする。
「ああっ、はぁ、ひ……うああ！」
ビアンカの反応は特にクリトリスのあたりで激しくなった。
「ふむ……やはりここが良いようですね」
男は得心したように言って、クリトリスの部分を集中的に刺激する。
「はぅ……ん、はぁああ！」
ビアンカの声の質が変わる。
（きもちいい……きもちいい、けど……！）
いつしかビアンカは男の指による快楽を求め、身体をゆすり始めていた。
無意識のうちに男の指が心地良いところに当たるように動いてしまう。
「ひぁ……はぁう、ん、はぁ……あ、ああう、んぅ！」
男の指が一瞬クリトリスに触れた。
それと同時にビアンカの全身が震え、パッと血色もよくなる。
部屋のなかは熱気に包まれて男たちもうっすらと汗をかいている。
「あく……ひ、はぁ、あぅう……！」
全身がびくびくと跳ね、男の指を求めて震える。
ビアンカのクリトリスは限界にまで充血して勃起した。
「どうですか？　クリトリスに触れて欲しいでしょう」
男がいやらしい笑みを浮かべながらゆっくりとビアンカに問いかける。
「う……あ……はぁ、あ……や、い、やぁ……」
「欲しくてたまらないはずですよ」
「はぅ……く、ん、んぅ……ぅあ、はああん！」
男の言葉に応えることができず、ビアンカはただいやいやと首を横に振る。
（いや……いやなのに……。どうして欲しくてたまらないの！？）
ビアンカはもう自分で自分がわからなくなっていた。
何とか男の言葉を否定しはしたものの、身体のうずきは止められない。
下半身は男を求め、まるで指に股間を押し付けるように動いてしまっている。

「意地をはらなくてもいいんですよ。
これはあくまでクスリのせいなのですから……」
言いながら、男が再度クリトリスに触れた。
激烈な快感がビアンカの脳裏で弾け、感覚を狂わせる。
「あ、ひ……! いや、いい……あ、はぁ、きもち、い……う、あああっ!」
ついに男が本格的にクリトリスを弄り始める。
「っあああぁぁっ! いや、や……あ、い、ぅ、ふあああ!」
それと同時にビアンカは一気に絶頂に達した。
「ああ、あああああああっ、あぅ……んんぅ!」
今まで散々焦らされただけに、快感はあまりにも大きなものだった。
ビアンカの意識を全て洗いながし、悦楽一色に染め上げる。
「あ、や、だめ……また、すぐ……イ、く、あ、イ……くううう!」
男はクリトリスの包皮を剥いて直接に刺激している。
愛液が垂れ流されるのを見ながら、執拗にクリトリスへの愛撫を続けた。
「あ、い、ぅ……く、イ……んふぁあああ!」
怒涛の連続絶頂だった。
男の巧みな愛撫によって、絶え間ない快感の波がビアンカを襲い続ける。
「あ……いやあ! もう、イキ、すぎて……はぁ! ん、や、また……あああっ!」
断続的に訪れた絶頂はもうこれで四回目だった。
ビアンカは男の手の動きにあわせて人形のようにがくがくと全身を震わせる。
「そう……素直になればいいんですよ」
男は笑いながら執拗にビアンカのクリトリスを刺激した。
下から上にこすりあげる動きを正確に何度も何度も続ける。
あまり経験のない女性にとって、その愛撫が一番効果的なことをわかっているのだ。
「あ……う、く……ひ、あ、い、あ……い、う……
あ、あああああぁぁぁぁぁぁっ!! おかしく、なる……!」
絶頂が止まらない。
小さなものも含めればもう自分でも数えきれないほど達していた。
「う……あ、ひ……はぁ、はぁ、はぁ……!
もう、やめ……とめて、おねが……あ、はぁ、ひぅ……! ん、はぁ、あああっ!」
「そう、そんな風に素直になればいいんですよ……」
男はビアンカの耳許に口を近づけた。
「イかせるのを止めて欲しければ、口で私のをくわえてもらいましょうか」
「く……うぅ……っ」
ビアンカは屈辱を感じながらも男の言葉にうなずいた。
何にしろ、精神が壊れてしまうよりはマシだと思った。



(こ……こんな感じでいいの……？)
おずおずと舌をだし、自信なさげに男のものを舐める。
「は……ん、ちゅ、れろ……れる……」
それでもビアンカは一生懸命に自分の思いつく限りの奉仕をする。
だが拙い愛撫に男が満足するはずもない。
「こうするんですよ」
「ん、んむぅ！？」
男はビアンカの頭をつかみ、無理矢理ペニスを押し付けた。
「ぁ……は、ん、んちゅ、はむ……んふぅ！」
(く、くるし……！)
酸欠で朦朧とするビアンカ。
拘束からはすぐに解放されたが、間髪入れずにシックスナインの姿勢をとり、
ビアンカの股間を刺激し始める。
「うあ……！　はぁ、あ……やぁ……！」
ビアンカの脳裏にさきほどの連続絶頂の恐怖がよみがえった。
苦しげな息を整えることもそこそこに、男のものを必死でくわえる。
「そう、いい感じですよ。口いっぱいほおばって、舌も動かして……」
「ん、んふ……はぁ、ぁむ……ちゅぶ、れろ……える……」
男の言葉に従順に、丁寧に肉棒を刺激する。
男はビアンカに咥えさせたまま、自身も愛撫を再開する。
舌を伸ばして器用にクリトリスと膣口を舐め上げ、陰唇をねぶった。
さらに舌を突き入れてビアンカの初々しいそこをほじる。
(ダメ……感じて……！)
ビアンカは自分でも信じられないくらい膣内で感じていた。
「うあ……！　はぁ、んじゅ、ちゅぶ、んむ……！　はむ、れる、れろ、じゅぶ！」
おまけに――。
口で奉仕するのが気持ちイイ――そんな倒錯した性感が生まれつつあった。
自然、フェラチオには熱意がこもり、懸命に舌を絡め唇をすぼめるようになる。
「んちゅ、じゅぶ、んふ……はぁ、はむ、ん、れる、れろろ、じゅぼ、ぶぶ……！」
自分が下品な音を立てているのにも気づかず、必死にペニスをしゃぶった。
「く……そろそろ出しますよ……」
「！？」
男のモノが口内で膨らんだ。手にもったペニスの根元がびくびくと脈動している。
「あなたの頑張りに敬意をしるして、口内射精して差し上げましょう」
「ん、ふぁ、んん？！」
「全部受け止めなさい」
男の低い声がじんとビアンカの身体に響く。
わけもわからないまま、口いっぱいにペニスをほおばった。

「おお……っ！！」
びゅる、びゅぶ、どぶっ――！
「ん、んん、んく……、ごく……んぶ、ふぁ、あああ……！」
（す、すごいにおい……！）
ビアンカの口内、一番奥で男が射精する。
「うぐ……ぷは、はぁ……！」
「おやおや、こぼしてはいけませんよ」
男がビアンカの頭を軽く抑えつけた。
「ん、んぅぐ、ぅむ……、ん……！　ごく、ごくん……っ」
口を離しかけたビアンカだが、また喉の奥までずっぽりとペニスを咥えさせられる。
その姿勢のまま、男は残り汁まで余すことなくビアンカの口腔内に射精した。
「ぅ……は、ん……む……」
「残りはまだ飲み込んではいけませんよ。私がいいというまで口のなかに貯めていなさい」
「う……く、はぁ、んぅ……っ」
男は尿道に残った精液までしぼりだし、ビアンカの口内になすりつけた。
（口のなか……いっぱい……）
口腔内の異物を感知してどんどん唾液があふれ、精液と混ざり合う。
匂いがいっぱいにたまり、脳のなかまで男の性臭に犯されているかのようだった。
「舌で絡めなさい。これ以上こぼしてはいけませんよ」
「は……ぅ、く、れる……んふぁ、はぁ、う……」
男の指示通りに少し上を向いてこぼさないようにしながら、唾液と精液を口のなかで絡める。
「よし。飲み込みなさい」
「……ぅ……く、ごく、ん……ごく……く、んん……」
一回で飲み込みきれず、三回に分けてやっと飲み終わる。
牡の精を体内に受け入れたという実感がビアンカのプライドを砕いた。
「舌を出してみせなさい」
「ぁ……」
言われた通りにだらりと舌を出し、従ったことを示す。
白濁の名残がまとわりついているビアンカの舌を見て男は征服欲が満たされるのを感じた。
「よくできましたね。ご褒美に……」
男が周囲の男たちに何かを指示する。
（ああ……これでやっと解放される……）
「今度は挿入してイカせてあげましょう」
「え――そ、そんな！」
男たちが新たな拘束具を持ってきて、ろくに抵抗できないビアンカの手足を拘束した。
今度は大の字よりも恥ずかしい、陰部がしっかりと見えるような態勢――。

「は、離して……く、あ、はぁう……んんっ！」
男は問答無用で挿入する。
度重なる愛撫でビアンカのそこは十分なほど濡れている。
何の問題もなくペニスを受けいれた。
「あぅ……くう、ぅう、はぁ、やぁ！」
髪を振り乱して悶えるビアンカを、
男たちはいやらしい笑みを浮かべながら眺めた。
（入って、くる……っ）
ペニスを入れられていることをビアンカにしっかりと意識させるように、
わざと少しずつ少しずつ奥へと進めていく。
「あく……う、はぁ、く……！」
たっぷり数十秒かけてやっとペニスは最奥へと達した。
「う、ぁ……はぁ、はぅ……んぁ……」
「これで全て入りましたね……。
あなたは想い人以外の男に身体を開いたということになる」
「え……？」
「フフフ……こんな風に他の男に股を開いておいて、
想い人の男と結婚しようだなんて考えないでしょう？」
「そ、そんな……」
ビアンカの脳裏に浮かんだ愛しい人の顔が、徐々に色褪せていく。
「いや……やぁ、いやぁ！」
「お気の毒に……しかしこれがあなたの現実なのですよ」
男はゾ居がかった調子で言って腰を動かし始めた。
「あぁ、はぁ！　あっ、ぅん、んんっ！　くぅ……！」
「そら……全て忘れて、今のこの感覚に浸ってしまいなさい！」
徐々に男の腰の動きは激しくなる。
パン、パンと大きなストロークで乾いた音を立て、
自らの股間をビアンカの太股に何度も何度もぶつける。
「あひっ！　ぅう、んぅ！　はぁ、はぅ……く、ひぁ、いやああ！」
（リュカ……！）
愛しい人の顔と名前を思い浮かべても、
男が腰を突き入れてくるたびに脳裏から掻き消えた。
ペニスが最奥を叩くたびに思い出が色あせ、薄れていく——。

「おお……素晴らしい締まりですよ！」
「うああ、はぁ、あぅ……く、ぅう、んはぁ！　あ、ひ、ぅ……く、ぅう、んぅ！！」
ビアンカの膣襞はしっかりと絡みつき、男のモノに確実に快感を与えている。
ビアンカ自身も膣内を男のもので荒らされるたびに、胎内を直接こそぎ落とされるような悦びを感じていた。
「だ、めぇ！　ぅあ……く、ふぅん、はひ……！　い、ぅ、あ、はぁ、ああ……！」
男はビアンカの腰がもの欲しげに動いているのを見逃さず、挿入しながらクリトリスに触れた。
「いう……あ、あああああああああああぁぁぁっ！！」
軽い絶頂――。ビアンカの全身がびくびくと震え、膣内の締め付けがさらに強くなる。
「さっきのように……このままま連続でイカせてあげますよ……！」
「あ、やぁ、いやぁ！　あれ、いやぁ……。はぁ、あ……おかしく、な……るぅ！　うう、あ、はぁ、だめぇ！」
男はクリトリスを擦り上げながら、激しくビアンカの膣内を突いた。
ぎゅっ、ぎゅっと脈をつけて締まる膣襞の感触を堪能しつつ、勢いに任せて突きまくる。
「あ、う、あ……！　く、る……また、はぁ、ああああぁっ！　いや、あ……また、だめ……！　イキすぎて、はぁ、はぅ……んんんんうう！！」
短いペースでビアンカの全身ががくがくと震える。
もう軽い絶頂がずっとつづいているのだろう。潤んだ瞳からは理性の光がほとんど消えた。
（リュカ……だめ、私……あ、はぁ、い……こ、こんなの……もう、耐えられない……！）
「おお！」
男の腰の動きが小刻みに変化し、ビアンカの奥ばかりを何度も何度も細かく突く。
「あ、ひ、あああっ、くぁあ！　ぅあ、はぁ、ひぅ、ん！　んふぁ、はぁ、は、う――はぁ、あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
ひときわ強く膣口が締まる。
それでいて奥はじわりと開いてペニスを包みこみ、更に奥に受け入れるようにして――子宮口が精を受け止めるために開いた。

「あ、ひ――あああああああああああああああああああああああぁぁぁ！！」

びゅぶ、びゅ、どく――！
ビアンカと男は同時に絶頂に達した。
胎内は完全に男を受け入れ、開ききって男を奥へ奥へと導く。
「く……ふぅ……」
男は満足気に腰を震わせ、最後の一滴までビアンカの膣内に注ぎきった。
「あ……はぁ、ぅ……はぁ、はぁ……」
「ククク……あなたは素質十分ですよ」
男がペニスを抜く。結合部から白濁した液体がどろりとあふれだした。
「あなたがメスブタになるまでにそう時間はかからないでしょう。私たちが面倒を見てあげますから、心配しないでくださいね」
別の男がいきりたったものを構え、ビアンカの膣口に押し付ける。
「あ、や……だ、め……まだ、は、ぅ……あ、あああぁぁぁっ！！」
無慈悲な挿入と、それと同時にビアンカの背筋を貫いた絶頂。ビアンカの頭のなかから最愛の人の存在が消えるまで、この宴は続く――。

アリーナ編

サントハイム城の壁を蹴破り、意気揚々と一人旅に出たアリーナ。
まずは城下の視察とばかりに、
普段は家臣に行ってはいけないと言われている地域に足を踏み入れた。
そこは貧民街。
アリーナにとってその場所はスリリングで
刺激的で見たことのないものにあふれていたが、
物珍しげにスラム街を練り歩く“姫”の姿は目立ちすぎた。
ほどなくして人さらいの集団に遭遇してしまう――。
「……あなた達、何か私に用でもあるの？
さっきからジロジロ見て、失礼じゃない」
怪しげな風体の男たちに、アリーナは世間知らずゆえにいきなり声をかける。
「……おい、そんな小娘にかまうな。とっとと行くぞ」
「いや、よく見てみろ。そこらの村娘とは服の生地が違うぞ。
こんな場所を女一人でうろうろしているところを見ると……」
「貴族か富豪の家出娘か？
へへ……よく見りゃ上玉だ、こりゃ高く売れそうだぞ」
アリーナを見る男たちの視線が変化する。
「何よ、こそこそ話して！　用件があるなら言いなさいっ」
男たちが自然と散開してアリーナを取り囲むような態勢になった。
油断なく周囲をうかがいながらじりじりと包囲の輪を狭めていく。
「……！？」
ただならぬ気配を感じ、
アリーナはやっと自分の置かれている状況を正確に把握し始めた。
「どういうつもり……？」
「へへ、お嬢ちゃんよ……
ここはあんたみたいな娘が手ぶらでくるようなところじゃねえんだよ」
「……フン、悪役にぴったりのセリフね。
いいわ、全員まとめてやっつけてあげる！」

アリーナは戦いに敗れた―
「さて…売る前にこのカラダ…オレたちで味見するとするか」
「いやっ！…ダメッ！…い…いやっ…あっ！ あああっ！」

「さすがいい蹴りやってきただけあって締まりのほうもスゲェ」
「いやっ…！ ダメッ！ ダメなの！ おねがい！」
「何だぁ？ 急にしおらしくなって……
せっかくだから最後までおてんばを演じてくれよ」
「そのほうがレイプしてるほうとしても盛り上がるってもんだぜ」

「あっ！ ああっ！ やああっ！
あああああっ！」

戦いにやぶれ、気を失ったアリーナは男たちに捕らえられた。
アジトへと運び込まれ、入念に拘束される。
そのための道具や設備はアジトに十分すぎるほどにそろっていて、
しかも男たちの手際は驚くほど良かった。
ぐったりとして動かないアリーナを
慣れた手つきで素早く丁寧に縛り付ける。
男たちは貧民街に出入りする奴隷商人だった。
身寄りのない子どもや口減らしにあった少女、
借金のカタに売られた女を買い叩き、時にはさらい、
必要ならば調教して売買する稼業。
アジトの設備や出入りする人数を見ると、
かなりの規模のようだった。
アリーナは最悪の相手に敗れてしまったのだ……。

「どこかで見たツラだと思ったが……あんた、サントハイムの王女さまか？」
縛り付けられたアリーナに男が聞く。
「……ッ」
「どうやら本当らしいな。こりゃ高く売れそうだ」
薄ら笑いを浮かべつつ、男たちは筆を取り出した。
傍らに置いてある薬瓶の中身をたっぷりと筆につけ、アリーナに突きつける。
「ククク……これが何かわかるか？」
「媚薬だよ、媚薬。これを塗られた女はみんな天国にいけるのさ」
「い……いや！」
見知らぬ男の前で肌をさらす屈辱に耐えていたアリーナもさすがに動揺する。
「まあそう焦るなよ。今からこれを体中に塗りこんでやるからな」
「う……くぅ、うぅ……！」
アリーナがどうにか拘束から逃れようと全身に力をこめ、身体をゆする。
だがしっかりと結ばれた縄はアリーナに全く自由を与えない。
媚薬をたっぷりと含んだ筆がアリーナの身体を這いまわる。
「ひ……！」
最初に感じたのは液体の冷たさと毛筆独特の感触。
肌の上を怖気が走り、嫌悪感にどっと汗がふきだす。
アリーナはぐっと歯を食いしばり男たちを睨みつけた。
本当は裸同然の姿をさらしているだけでもめげてしまいそうだったけれど、
弱みを見せるのは彼女のプライドが許さない。
「平気よ、これくらい！」
「そうこなくっちゃな」
楽しむように言って、筆で媚薬を塗る作業を再開する。
「く……うぅ……ぅ……はぁっ！」
筆のなんともいえない感触がアリーナを責める。
不快と快のちょうど中間の感触が同時に何度もアリーナの肌の上を這った。
「なんだ？　その声は」
「く……！」
男は挑発しつつも、筆の動きはゆるめない。
「ぁ……く、ん、はぁ……！」
だんだん声を抑えきれなくなるアリーナを見て、男たちの熱も高まっていく。

「ん、はぁ、ああ、はぅ……ん！」
嫌悪感が色濃かったアリーナの声色に、徐々に違う意味が混ざり始める。
薬を塗られた場所がどんどん熱く、痒くなってきている。
「あ、う……はぁ、はぁ……」
胸を強く揉みしだかれる。
男の指が自分の胸にめりこんでくる感触にびりびりと背筋が震えた。
「だいぶイイみたいじゃないか」
「そんなわけな……！　あ、はぁ、んぅ！」
（この薬のせいで……）
頭がぼうっとして、時折何も考えられなくなる。
（ダメ……気をしっかりもって、きっと助けが……）
真っ先に心配して助けにきてくれそうな人の顔が思い浮かぶ。
それが今のアリーナにとって大きな支えになっていた。
「ここはどうなってるかな？」
男たちにはまだまだ余裕があった。
アリーナの反応が確実に高まってきていることを見抜き、ようやく股間へと手を伸ばす。
「そ、そこは……いや、やぁ！」
とっさに暴れるアリーナ。
けれど男たちがっしりとその肩をつかみおさえつける。
「あ、うぅ……く、うぅ！」
「ここにもたっぷりと媚薬を塗ってやろう」
「いや、やめ……ああ、はぅ！」
下着越しに愛撫しながら、男が指で直接媚薬を塗りこむ。
「う、はぁ、ああ……！」
粘膜に直に薬が触れる感触はたえがたいものだった。
冷たさと熱さを同時に感じ、さらに痺れがじんじんと広がっていく。
「うぐ……はぁ、うん……く、ふぅ、はぁ、はぁ……！」
すぐに息が荒くなり、頬が紅潮する。その敏感な反応は男たちを楽しませた。
「み、見てなさいよ……あなたたちなんて、今にきっと……あ、はぁ！」
あざ笑う男たちに、アリーナが口で抵抗する。
けれど、いよいよ媚薬が浸透してきた身体に触れられるとすぐに言葉は止まってしまう。
「う……く、はぁ、いや……ああ！　はぁ、はぁっ……」
男の指が股間を這い回る。
太くてごつごつとした感触は、敏感なアリーナには耐え難いものだった。
「よし、そろそろ良いだろう。下ろせ」
男が指示し、アリーナを吊るしてあったロープが解かれる。
（やった……！　拘束のゆるい今がチャンス……！）

唐突に訪れた反撃のチャンス。

「あ……れ……」

だが、地に足がつくと同時に

アリーナはその場にへたりこんでしまっていた。

「く、あ……！」

（立てない……！）

「ふふふ……たっぷりと特製の媚薬を塗りこまれたんだ。

筋肉も弛緩して当然さ」

男の言葉の通りだとアリーナは直感的に理解する。

意思に反して身体に力が入らないどころか、

心臓ばかりが激しく脈打っている。

そしてそのたびに身体全体の感覚がおかしくなっていく。

男の指が改めて股間に触れた。

「いやぁ、はぁ、ああ……！　く、ううん！」

「ほら、言った通りじゃないか。

あんなに暴れようとするからクスリがまわってるんだ」

男は嬉々として言いながら、アリーナの秘所を指でこすりあげる。

「はぁ、ううん、いや……やぁ、あああん！」

十分に媚薬の効果に浸った身体には単純な上下の刺激だけで十分だった。

男の指がいくらも往復しないうちにどんどん愛液が溢れてくる。

肌の表面の感覚は二倍に、

粘膜の感覚はさらにその数倍になっているかのようだった。

「あ……く、う……んぅ、ふぁ、はぁ、はぁ……！」

こんな男に体重を預けているのは何ともいえず屈辱的だった。

けれど今の自由にならない身体では、その現実を受け入れるほかない。

「ああ、はぁ……ん、はぁ、ひ……う、くぅ！」

（冷静にならなきゃ……）

敏感になりすぎてしまった身体から

なんとか意識を切り離して思考をめぐらす。

（ヤケになったらダメ……

クスリの効きが良いってことは、きっと効果が切れるのも早いはず……。

このまま耐えれば、またチャンスが……）

アリーナの瞳に意思の光が灯る。

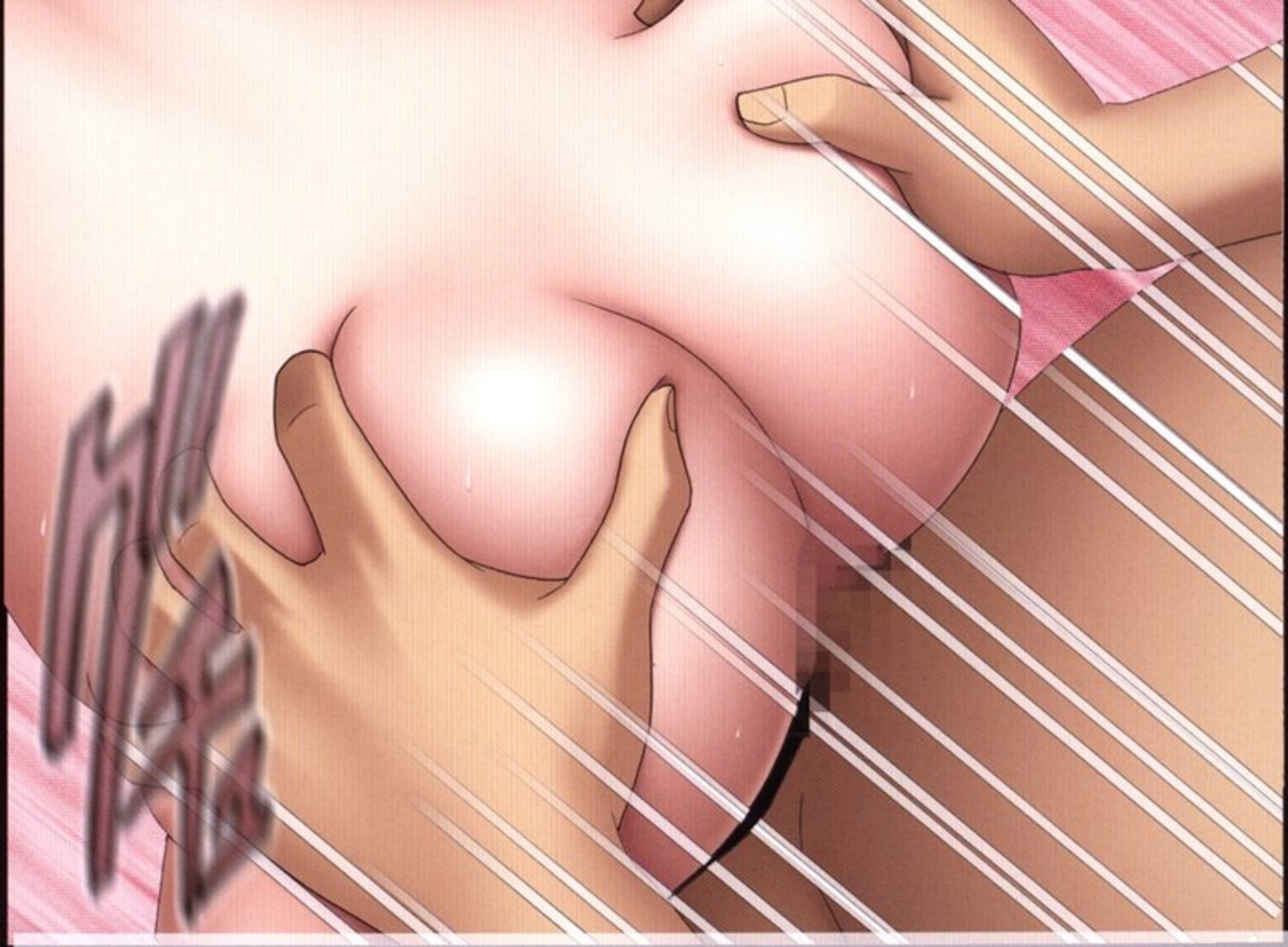
だが――それを見逃す男たちではなかった。

今まで何人もの女を堕としてきた経験から、

何を考えているのかはだいたい予想がつく。

男たちは、うぶで世間知らずなアリーナの想像の上を行く。

「ケツの穴のほうはまだ処女だろう？よく調教しておくか」
言いながら、男がアリーナの後ろの穴に触れる。
「ひゃ！？」
（ま……まさか、お尻の穴で！？）
男の指がうねり、ちゅうちょなくアナルに入り込んでくる。
「あ……うぅ、はぁ、あああっ！」
「ん？　いきなり愛液が増えやがったな。そんなにこっちが気持ちイイのか？」
「ち、違う……！　ふぁ、ああ……はぁ、ああぅん！」
「身体はそうは言ってないみたいだがな」
（嫌なのに……どうして……私……っ）
息が苦しくなって、目の前がちかちかする。
「はぁ、あ、はぁ、あぅ……！　ん、はぁ、やあ、だめぇ！」
男の指の動きがより積極的になって、ついには小指で出し入れを始めた。
垂れた愛液と媚薬が混ざりあってぐちゅぐちゅと音を立てる。
「このぶんならそろそろいけるだろう」
一人がつぶやくように言って、アリーナのアナルに自らのものをあてがる。
「いや！？　そんな、待って……あ、やぁ、いやあ、はぅ……ぅ、くううううっん！」
ずぬ、ぐぬ――。
存外にあっさりと、アリーナのそこが亀頭をくわえこむ。
「アナル処女も俺たちのものだ。くやしいか？」
「あ……は、うあ、はぁ、あぅ――」
「好きな男がいても、もうお前は何も捧げることができない。ハハハハ！」
嗜虐的な笑みに口角を上げつつ、男はゆっくりとアリーナのなかへと侵入していく。
「ほら、よく見てみろよ。きっちりくわえこんで、いやらしい穴だ」
「や……いやぁ、ああ……」
とうとう男のモノが完全に埋った。それと同時に始まる抽挿。
「はぁん！　ひっ、はっ、ああ、やあ……！」
（なにこれ……おかしい、おかしくなる……！）
膣内に入れられたときとは全く違う感触にアリーナは酔う。
潤滑液のおかげで痛みはなく、太い息苦しさが出入りするたびに頭に閃光がまたたく。
「ひっ、うぐ、はぁ、あ！　はぁ、あぅ、いっ、くあ……！」
声を我慢しようとしても全くかなわなかった。まさに身体の内側を直接犯されている。
「ククク……まだまだこんなもんじゃないぜ」
別の男がアリーナの正面に立ち、隆起したものをアリーナの秘所に押し当てる。
「え――」
もの欲しげに収縮していた膣口は、新たなペニスを案外簡単に受け入れた。
「うあ――や、ああっ、はぅ、あ、はぁあああああん！」



「二穴同時攻めは初めてだろう？」
「う……く、はぁ、ああ……っ」
苦しくて息をするのがやっとなくらいの圧迫感。
だが、その圧倒的な感触が徐々に興奮を伴ってぴりぴりと背筋を震わせる。
「ああ……はぁ、あー、ぐ……うぅ、う……」
「なんだ？　もう二穴責めが良くなってきたのか？」
「ち、ちが……はぁ、くぅ、ううん！」
「もう動いても大丈夫そうだな」
男たちも高揚を隠さず、アリーナのなかを突き始める。
「あああっ！　ひっ、いや、ああ！　だめ……く、あ、苦し……うぅ、んんぅうう！」
「口も塞いでやろう」
「うぅんむぅ！」
更にアリーナの口にも男のものが押し当てられ、問答無用で口内に侵入してくる。
（うぅ……苦しい……！）
半ば酸欠状態のアリーナは、それでも必死に口をあけて呼吸をする。
「うぅ、じゅる、じゅぽ……ふぁ、はぁ、はむ、ん……！」
酸素を確保しようとする口内の動きが、男のモノに快感をもたらした。
「たまらないな……あんなじゃじゃ馬娘が、俺たちに奉仕してやがる」
「あぅ、んんぅ！　くっ、はぁ、ひあ……あああっ！」
前後から突き崩されるともう何が何だかわからなくなる。
股間にはおびただしい量の愛液が伝い、
アリーナの肌も男たちの肌もぐしょぐしょに濡れていた。
「はぁ、うぅ……んぐ、ちゅぷ、んはぁ！　はぁ、はぁ……んむ、ふぁ、あぅ……！」
媚薬の効果もあって、アリーナのありとあらゆる粘膜の感度が上がっている。
その変化にアリーナ本人は気づいていない。
ただどこもかしこも男に犯され、
服従させられている屈辱とないまぜになった快楽があるだけだった。
（ダメ……感覚がどんどん高ぶってきてる……！）
正確に自分の状態を把握することはもうできていない。
犯されながらもどんどん鋭敏になっていく感覚。
今ではもう膣内と腸内のペニスの亀頭の形、
そしてそれらが奥でこすれあう感触すらわかってしまう。
「あぅ……く、ふぁあ、ダメ、いちばん奥は……！　ひっ、ふあ、はああん！」
「ん？　奥がいいのか？」
男ふたりが示し合わせ、同時に最奥を突く。
「あ――ああああああああぁぁぁっぁああ！
やあ、く、だめぇ！　いっしょに、したら――！」

二本の不規則なピストンがアリーナの最奥を突くたびに、
身体がバネのように跳ね上がる。
「たまらねぇな……」
適度に鍛えられた柔軟な筋肉とと感じ易い神経、
そして少女のみずみずしい媚肉。
まさに男を喜ばせるためにある身体だった。
「ああ、はぁ、う……ん、ちゅぶ、はぅ……！」
アリーナの瞳の色はもう熱に浮かされたようになっている。
（クる……なにか、すごいのが……）
「ひ……ふぁ、はぁ、ああ……」
（だめ、怖い……ぜったい、おかしくなる……！）
男たちもそろそろ限界だった。
「ふぁあ、ああん！　ふぁ、ちゅぶ、れる……ぅう、はぅ、くぅ……！」
欲望のおもむくままにアリーナの身体をむさぼり、
自らの雄の性をぶつける——。
「あ、はぁ、あぅ——」
感じたことのない高まりがアリーナの胸にあふれ、強く切なく締め付ける。
「うお……そろそろイクぞ……」
「ああ、こっちもだ……」
「くぅん！　あ、はぁ、ひあ——ああっ！」
男たちの動きが強く激しく、そして単純になる。
アリーナは全身でもってその変化を受けいれ、胸が高鳴るのを感じた。
「はぁ、ああ！　ああ、だめ、イ……く、イっちゃう……っっ！」
「うおおおっ！」
どぐ、どぶ、びゅぶ——！

「ふぁあああああああああっ！！」

三つの男の精が一気に体内で弾ける。
最後にアリーナは自ら腰を落とし込み、
口内いっぱいにくわえこみ、ありえないほど大きな絶頂に達した。
びゅる、びゅぶ、どく——。
口内に、尻穴に、そして膣内に熱いものを注がれていく。
「あ……はぁ、ふあ、はぁ……」
口の端から白濁をあふれさせながら、
アリーナは男の胸のうえへとゆっくりと崩れ落ちた……。

マーニャ編

街中、酒場通りの深夜。
酔っ払い達の喧騒や怒号もそろそろ止もうかという時間帯。
マーニャは酔いに任せてふらふらと千鳥足で安宿への裏通りを歩いていた。
「……ちょっと待て」
「うん？」
突然後ろから声をかけられて振り向く。
路地を通せんぼするような形で男が二人、立っていた。
背後にも二人、また裏路地をふさぐ形で現れる。
総勢四人の男に前後を完全に挟まれた形になった。
「……誰？　どういうつもり？」
「俺たちが貢いだ金で飲んだ酒はうまかったか？　マーニャちゃんよぉ」
「え……」
月明かりに男たちの顔が浮き上がる。
皆、どこか見覚えがある――。
「散々都合のいいことばっかり言いやがって！
全部ウソだったんだな、この女狐め！」
（あちゃー……）
男たちは以前マーニャに告白してきて、ふられたファンたちばかりだった。
本来は“遊び”を知らない真面目な男たちなのかもしれない。
だが、行き過ぎた好意はマーニャにとっては迷惑きわまりない。
「どれだけマーニャちゃんを観に行ったと思ってるんだ……大枚はたいて……
それを、俺たちの純情を、ふみにじりやがって！」
「うるさいわねぇ」
「な、何だと！？」
「逆恨みはやめてもらえるかしら」
「貴様ぁ！」
大声が頭にがんがんと響く。
「……これは、天罰だ！　男の心をもてあそんだ罰だ！」
男たちは懐から武器を取り出す。
（ちょっと、本気なの？）
前後を挟まれているうえに、悪酔いしていてコンディションは最悪だ。
マーニャは挑発してしまったことを少しだけ後悔した。

戦いに敗れたマーニャ―
「マーニャちゃんの処女　もらっちゃうよ～」
「ダメッ！ね！？　おねがい！待って！
他のことだったら何でもいうこと聞いてあげるから…！」
「いまさらそんなこと言っても遅いよ。ここまできたらもう
「止められないよ」

ズブッ

「やっとひとつになれたねマーニャちゃん。
でもまだまだこれからが本番だからね。
毎日毎日かわいがってあげるよ。」
「楽しみだなぁ……
マーニャちゃんのカラダに毎日いやらしいことを出来るだなんて」
「あああああああああああっ！」

ビクッ

ビクン

手首と膝に鈍い痛みを感じてマーニャは目を覚ました。
「う……！？」
気がつくと、見たこともないような拘束台に手首と脚を繋がれてしまっている。
「目が覚めたかい？」
「……最悪の気分ね」
マーニャは毒づいて男たちを睨む。
さっき襲ってきた面々が部屋のなかにそろい、
いやらしい笑みを顔に貼りつけながらマーニャを見ていた。
「特製の拘束台だよ。どう、すごいだろ？」
男は嬉々として言って、マーニャの背中を撫でた。
「ああ……すべすべの褐色の肌……。たまらないよ」
他の男も群がってきて、あちこちを撫でる。
「ちょ……この、やめなさいよ！」
マーニャが抗議しても男たちはどこ吹く風。
自分たちの圧倒的な優位を確信し、余裕の表情で手を這わせる
「ずっとこうしたいと思ってたんだ……」
「う……あ、く……っ」
言いながら男たちは更にべたべたとマーニャの身体に触れる。
(最低……！)
「でも仕方ないよね。今まで自分がやってきたことを思い知るといい！」
勝手なことを言って、男はマーニャの胸をもみしだいた。
「く、あ……う……っ」
「ああ、夢にまで見たこの感触……。
柔らかさもたっぷりとした重さも、最高だよ」
男たちは嬉々として話しながらマーニャの身体と反応を堪能する。
「う……あ……」
歯を食いしばって男たちの手の感触に耐える。
マーニャは踊り子の仕事をして、その正当な代価を受け取っただけだ。
個人的な金銭の授受をしたことは一切ない。
完全なお門違いの理不尽な話だったが、今の男達にそんな理屈は通じなかった。
「へへへ……たっぷりおしおきしてあげるよ……」
男たちの興奮の度合いが徐々に高まってくる。
マーニャが本当に何の抵抗もできない状態であることが、
段々実感できるようになってきたのだろう。
「ふざけないで！　あなた達にそんなことされる筋合いはどこにもないわ！」
「ふ、フン……そんなすごんだって無駄だぞ。
俺たちはもうだまされないんだからな！」

男たちは半裸になり、マーニャの身体にむさぼりついた。
「マーニャちゃんのここはどんな味がするのかな？」
ぞろりとした感触がマーニャの秘所を舐め上げた。
太い舌をそこにべったりと貼り付かせ、たっぷりと唾液をまぶす。
（気持ち悪い……！）
マーニャが身悶えしてガタガタと拘束台が鳴る。
だがその土台はびくともせず、マーニャの力を完全に殺してしまう。
（ダメ！なんて頑丈なの……！）
「ああ……マーニャちゃんのここ、おいしいよ……」
「く……っ！」
男の唾液で下着まですっかり濡れてしまったのがわかる。
他の男たちも思い思いの場所を弄り、マーニャの性感を刺激した。
「う……く、はぁ、あぅ……！」
小太りの男は執拗に股間を舐める。全くやめる気配はない。
他の男が胸をもみ、先端をつまむ。
その感覚と股間を舐められ続ける高ぶりが混ざった。
「く……うぁ……はぁ、あ、やめ、やめ、なさい……！
さもないと、はぁ、う……くぅ、うぅん！！」
「まだそんな口をきくのかい？　ムダだって言ってるのに」
（う……ま、魔法が使えれば……）
「だからムダって言っているだろう？」
マーニャの思考を読んだかのように男は笑う。
肩をすくめ、呆れたというそぶりまで見せながら。
「この拘束台には魔力を奪う効果もあるんだ。
キミは魔法も扱えると聞いてたからね」
「そ……んな……」
マーニャの顔に焦りの色が濃く浮かんだ。
「く……あ、う、はぁ、ああ……！」
マーニャの気勢が削がれると男たちはますます図に乗る。
首筋や太もも、脇腹にも舌を這わせた。
全身を男たちの唾液まみれにされ、汚されていく。
マーニャはいつしかむせかえるような男たちの性臭のなかにいた。
「あぅ……う……はぁ、う……くぅ！」
股間への責めはずっと続いている。
小太りの男は本当に全く飽きることなく、
マーニャの秘所に舌を這わせ続けるのだった。

それからさらに十数分。男たちの執拗な愛撫は変わらず続いていた。
「んふ……ふぁ、はぁ、あ……！」
肌にじっとりと汗がにじんで、徐々に頬も紅潮し始めている。
汗の量も多くなり——同時に愛液の量も増える。
「んはぁ、はぁ、んぅ……！？」
（な……なんで！？　さっきまではどうともなかったのに、急に感じて……！）
男が舌を突き出すと、ついに切なげな声をあげてしまう。
長時間にわたる愛撫によって、マーニャの性感はいやおうなく高まってしまう。
「ひ、うぅ……はぅ、くぅ……んぁ、はぁ、あく……！」
（気持ちよくなっちゃダメ……っ！）
小太りの男の舌がついにクリトリスを弄り始める。
硬くした舌先で弾くように肉芽を舐め上げ、
時折大きな音をたててあふれでた愛液を吸った。
「ぅ……く、ふぁあ、あぅ……いやぁ！」
「ずじゅ、ずぞぞ……ふぅ……最高だよ、マーニャちゃん！」
クリトリスへの強い刺激と、愛液を吸われる恥ずかしさと嫌悪感。
それらがないまぜになってマーニャのなかで快感に変化する。
「あ、ひ——ぅ、あ、や、あ、あ、ああ……！」
マーニャの背筋がびんと伸びた。脚も強く突っ張り、がくがくと全身が震える。
「ふふ……いいよ、イッちゃいなよ……ずじゅ、ぞぞ、ずぞぞぞ！」
「あああっ！　だ、めぇ……ああああぁぁぁぁっ！！」
マーニャの頭のなかで白い閃光がはじけた。
愛液が一気にふきだし、男の顔をしとどに濡らす。
それをまた音をたてて舐めとって、すぐにクリトリスへの愛撫を再開した。
「ひ……あ、だめ……！　イッたばかり、なのに……！」
男は容赦なく舌を動かし、再びマーニャの性感を一気に押し上げる。
「あく……ぅ、あ、やぁ……だめ、また……いや、いやぁ！」
強制的な連続絶頂は痛みにも似た刺激になる。
「だめ、だめぇ！　激しく、したら……あ、く、ぅああ！？」
マーニャの身体が再びがくがくと震え始めたところで男は舌を離した。
「フフフ……これ以上されたくなかったら、そうだな、フェラチオでもしてもらおうか」
「え……」
小太りの男が指示すると、別の男がペニスをマーニャの顔前につきつけた。

「く……」
マーニャは仕方なくペニスに舌を這わせる。
小太りの男はマーニャが奉仕しているのを見て一旦クリトリスへの刺激はやめた。
秘所には舌を這わせているが、クリトリスよりも快楽の度合いはずっと弱い。
（よかった……これでまだ、なんとか……）
男たちの前でこれ以上気をやらずに済むことで
幾分かはマーニャのプライドは保たれる。
「ん……ふぁ、んぅ、む……ちゅぷ、じゅぷ……」
「もっと音をたてて、奥まで飲み込んで！」
「ううんむ！？　はっ、ぅ……く、んむ、はぁ、はむ……じゅぽ……！」
男の要求はかなり無茶なものだった。
マーニャが動けないのをいいことに、腰を好きにゆすって快楽をむさぼる。
（最低……！）
完全に男たちの玩具にされている自分がどうしようもなく情けなかった。
けれど、そんな自虐的な気持ちが
今のマーニャの中ではじわじわと快楽に変化していく。
本人はまだそれほど意識してはいないが、
確実にマゾヒスティックな性感が生まれつつあった。
「はぅ……ん、はむ、ちゅぷ、くぷ……」
いつしか口腔奉仕にも熱がこもっている。
唇をうまく使って男の雁首をつつみ、舌をいっぱいに伸ばして裏筋と玉袋を舐める。
「そうそう、いい感じだよ……やっぱりやればできるじゃないか。
売女がもったいぶらないでくれよ」
（ちがう……！　私は、売女なんかじゃない！）
「フフフ……いいね、その視線、その顔……。そして何といってもこの肌の色」
男はいとしげにマーニャの肩を撫でる。
「ぅ……はぁ、んむ、ちゅ、はむ……っ」
性の玩具を見る視線は屈辱的だった。
だが、いくら怒りを覚えようともこの拘束台がある限り力関係は変わらない。
（魔法が使えれば……こんなやつら……！）
激しい感情がマーニャのなかでとぐろを巻く。
そしてそれと正比例するかのように、性感も密かに高ぶっている。

「さて……そろそろ本番といこうかな」
男が隆起したペニスをマーニャの秘所に押し付けた。
長い時間舐められ続け、絶頂にも達したそこはもう十分すぎるほどほぐれている。
男のものがマーニャの膣内をわり開き、ゆっくりと侵入してくる。
絡みついてくる蜜壺。挿入しているだけでもそれなりの快楽があった。
「う……く、はぁ、うぅ……！」
男がゆっくりと腰を動かし始める。
「あっ……くっ……はあっ……！」
結合部からじゅぶじゅぶとはしたない音が鳴る。それだけマーニャの膣内が濡れている。
「うぁ、はぁ、ん……あんた達、最低だわ……！
こんな女に大勢でよってたかって、こんな拘束台まで使って……」
「今更そんなことを言うのかい？
……いよいよ自分が逃れられないことを自覚してきたのかな？」
「く……！」
確かに男の言う通りかもしれなかった。
彼らが自分を逃す気が全くないことを悟り、
隙をうかがうというよりはただ単純に屈辱を紛らわせるために口先で抵抗している状態だ。
「図星だったかな？　その通り、キミはもう俺たちからは逃げられないんだよ……」
「あぁ、く、はぁ、ひぃん！」
男は悦に入っていって、抽挿を力強くした。
拘束台におさえられたマーニャの腰が跳ねる。
膝を曲げ、まさしくメス犬のような姿勢で男の陵辱を受け止めるほかない。
「覚えておきなさいよ……！　絶対復讐してやるんだか、ら、ああ、はあああっ！」
いくらマーニャが吠えても
男たちはただにやにやと笑っているだけで全く聞く耳をもたない。
「ははは！　無力で可哀想な、可愛いマーニャちゃん……！
おま○この締め付けも最高だよ！」
「いや、ああ、はぅ……！　くぅ、ん、ふぁ、ああ……！」

「う……そろそろ出そうだ……」
男が後ろからマーニャの身体に組み付く。
褐色の肌をかき抱き、後ろから胸も揉みしだいた。
「ひっ、うう……あ、はぁ、はぅん！」
小太りの男は目を血走らせて必死に腰を突き動かす。
マーニャの身体は拘束台にしっかりとロックされ、
その衝撃がすべて膣に伝わる。
(こわれ、る……！)
何度も何度も強く子宮口を突かれる。
「あぅ……う、あ、はぁ、あぐ、うううぅ！」
(ダメ……屈したら……！)
「へぇ、意外に粘るんだね。まあいいよ、時間はたっぷりあるんだから……
中出しされる快感を覚えこませてあげるからね」
男の不吉なセリフにマーニャの皮膚が総毛立った。
「い、いやぁ！」
男のものが少しずつ少しずつ膣内でかさを増しているのがわかる。
けれどマーニャにはどうすることもできない。
それでも心を折られないように、懸命に声を振り絞る。
「絶対に……あとで……仕返しして……やるんだか……ら……ふぅっ！」
「いつまでその心がもつか楽しみだよ」
マーニャの耳許で楽しげに囁き、激しいピストンを続ける。
「あ、はぁ、くぅ……！　う、あ、い……あ、はぁ！」
「う……イク、あ、イクぞ！！」
「あ、はぁ、いや……や、あああああっ、だめ……
く、あ、出て……出てる、ぅ、あああああぁぁぁぁっ！！」
びゅぐ、びゅる、ぶびゅ――！
大量の白濁がマーニャのなかで噴出した。
重い粘りがべたべたと胎内に張り付き、熱を感じさせる。
「あ――は、あぅ……あ、い……あ、はぁ……んうううっ！！」
他の男たちにも見られながら、マーニャは膣内射精で絶頂に達してしまう。
それからたっぷり数十秒間、
男は膣内に自らの残り汁までこすりつけ、やっとペニスを抜いた。
「う……あ……、はぁ……」
どろりと垂れる精液。
拘束台は外されないまま、すぐに次の男がマーニャの後ろに構えた……。

ミレーユ編

町外れの人気のない場所。
ミレーユの周囲に複数の男が現れた。
「……？」
男たちはミレーユを取り囲む。
「探したぜミレーユ。ガンディーノ王の命令だ。アンタを捕まえにきた」
「……ッ！」
「ガンディーノ王はどうしてもアンタのことが忘れられないらしいぜ」
男たちは笑いながらそれぞれの獲物を手にする。
「おとなしく俺たちについてきたほうが身のためだ。さあ、どうする？」
ミレーユは無言で構えた。
「やれやれ……少し痛い目見ないとわからないらしいな」
面倒くさげな言葉とは対照的に、男たちの表情は嬉々としていた。
噂通りの上玉と“遊ぶ”ことができるのを明らかに喜んでいる。
「ククク……野郎ども、ほどほどにな」
リーダー格の男がなめきった態度で他の男たちに呼びかけた。
それと同時に場に緊張が走り、双方が動き出す――。

戦いに敗れたミレーユ―
「処女は奪っちゃいけないって言われてるからな…しょうがねぇから今日のところはイカせるだけでカンベンしておいてやるぜ」
「やっ…！何を…！だめっ！あああっ！」
「ほら　ケツの穴も責めてやるぜ」
「これからたっぷりと変態の王様にかわいがってもらいな」
（いやっ…カラダの芯が熱くなって…！ダメッ！ダメッ！）
「あああああああああっ！」

ミレーユは、ガンディーノ王の“特別の浴場”に連れ込まれた……。
「ふむ……やはりお主はそそるカラダをしておるわ」
「ん……あ、はぁ……！」
ミレーユの胸をわしづかみにして揉みしだく。
自らの手のなかで自在に形に変える乳房を、王は乱暴に弄った。
「や……さ、さわらない、で……！」
たまらずミレーユが身をよじり、王の腕の中から逃げ出した。
だが抵抗はそこまで。身をよじる程度のことはできても、
立ち上がって走りだすほどの力はない。
「無駄だよ。大人しくしていなさい」
何かの薬の効果なのか、ミレーユの身体はほとんど麻痺してしまっていた。
「いや、あ、やぁ……！」
それでもミレーユは何とか王の腕から逃れようともがく。
そのいじらしい必死さがまた王を興奮させるのだった。
「すぐ気持ちよくしてやるからな」
言って、王はそばにあるたらいからヌルヌルとした薬液をすくった。
「あ、ひ……ん、はぁ！」
生暖かいそれをミレーユの身体に塗りたくり、お湯で引き伸ばしていく。
「どれ、気持ちがいいだろう」
程なくしてミレーユの身体はヌルヌルの薬液まみれになった。
「う……あ……」
滑りが増した肉体に、王の肌や手の感触をダイレクトに感じる。
ヌルヌルが自身と王の境界線を曖昧にし、
溶け合わせたようで何とも不快だった。
王は執拗にミレーユに身体を擦りつける。
「う、くぁ、はぁ……いや、ああ……！」
逃げようとするミレーユ。
だが、どんなにもがいても王から身体を離すことすらできなかった。

「まずはその形の良い胸を堪能させてもらおうか」

「う……痛ッ、あ……」

ミレーユの手首を縛り上げ、王は後ろから胸を揉み始めた。

「あ、ぅん……はぁ、あ……」

今度の愛撫は執拗だった。

飽きないのが不思議なくらい乳房を何度も何度も揉む。

後ろから伸びる野太い手が自分の胸の形を好き勝手に変えていくさまは

何ともいえず屈辱的だった。

「あ……うぅ……」

だが、次第にそれに妙な感覚を抱き始めている自分を感じ始めていた。

王はなおもミレーユの胸をもみしだいた。

その愛撫は次第に先端のほうへと移っていく。

円を描くように、外側から徐々に中心――乳首のほうへと指先が移動する。

「あ、く……ん、ぅあ……！」

ゆっくりとした指の動き。

しかし決して先端には触れずに、ただひたすらにミレーユを焦らし続ける。

指全体で柔らかさを堪能し、熱い息を首筋に吐きかけた。

「あ……はぁ、ん、はぁ、はぁ……！」

「うん？　どうしたのかね、そんなに赤い顔をして」

わざとらしいセリフ。

ミレーユがもどかしさを感じているのが承知でなおも焦らす。

「あまり焦らしても可哀想かのう……どれ」

王の指先がとうとうミレーユの乳首に触れた。

「あ、はぁ、ぅん……ああぁっ！！」

（な、なに……この感じ……！）

ミレーユの身体が跳ね、背筋がエビ反りになる。

さんざん焦らされた身体は、乳首への刺激を何倍も増幅して受け取っていた。

「あ……はぁ、はぅ……ん、はぁ……！」

ミレーユは身体をくねらせる。

それはまるで王のさらなる愛撫を望んでいるかのようだった。

「まったく、はしたない奴隷だな」

「ち、ちが……ぅ、はぁ、ああ……！」

王は楽しむように言い、指先で乳首をつまんで転がした。

「いやあ、ああ、や……あ、く、ぅぁ、あ……あぁぁぁぁっ！！」

王も予想していなかったほどのあられもない声。

「あ……はぁ、はぁ、んぁ……っ」

胸への刺激だけで、ミレーユは軽い絶頂に達してしまっていた。

（おかしいわ……こんなに敏感になってるなんて……）

実は部屋全体に漂っているお香の成分に、興奮剤が含まれていた。

ミレーユはそれとは知らず、

異常に感じてしまっている自分に戸惑いを隠せない。

「とんだ淫乱奴隷だな。この程度の愛撫でこんなに悶えるとはな？」

「ちが、う……ぁ、はぁ、い……ああっ！」

王の芋虫のように太い指がうごめいて、ミレーユの胸と秘所をいじる。

「ん、あ……あああっ！　はっ、あ、く――」

また軽い絶頂に達しかけ、危ういところで我慢した。

（ダメ……感じすぎる……！）

気が動転しているミレーユはお香による影響に気づいていない。

王の言葉の通り、本当に自分が淫乱なような気がしてくる。

（我慢……しなきゃ……っ）

王はそんな反応を見て笑い、ねちっこく指を動かした。

乳首を軽く転がしながら秘所を指でなぞりあげる。

「あ……はぁ、んぅ……」

中指で膣口をいじり、吸いついてくるそこを押し広げるようにして愛撫する。

「――あ、はぁ、ああ……く、ぅあああああっ！！」

膣口に指を出し入れされるとそれだけで頭のなかに白い光が散らばった。

「それ、ここはどうだ」

「――！？」

王の指が今度はクリトリスに触れる。

乳首と膣口とクリトリスの三点同時責め。

「あ、は――い、あ、はぁ、んぅうううっ！！」

ミレーユは簡単に絶頂に達してしまう――。

「う……あ……はぁ……はぁ、ふあ……はぁ……」

絶頂の余韻でかくかくと全身が震える。

「フフフ……わしのもとで奴隷として一生過ごすのなら、

いつでも快楽を与えてやるぞ」

「だ、誰が……あなたなんかの……！」

声を張り上げて言ったつもりでも、

震える身体では満足に言葉を発することもできない。

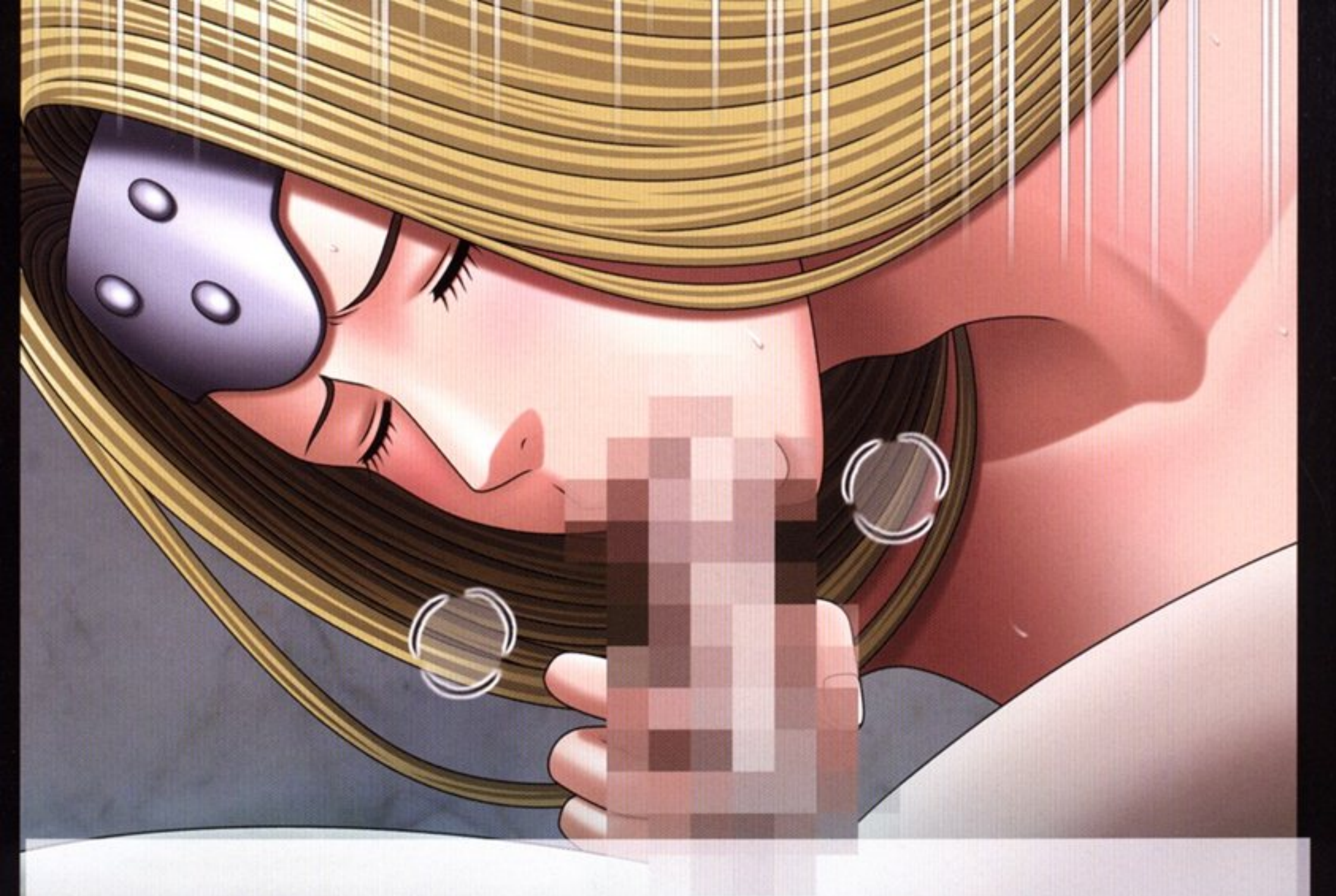
「ふむ。やはり一筋縄ではいかないか。

まあ良い。じっくり時間をかけていくことにしよう……」

王はひとり得心して頷く。

「今日はわしに口で奉仕してくれたら終わりということにしようか」

（く、口で……？）



目の前に突出された王の股間、そして隆起しているペニス。
赤黒くグロテスクなそれをミレーユは精一杯努力して口に含んだ。
「う……く、うう……っ」
唾える瞬間に後悔や屈辱や戸惑い、さまざまな感情が過る。
だが今のミレーユに選択肢はなかった。
「は……んむ、はむ……ちゅ……」
「さあ、これをしっかりやれば今日の奴隷としての仕事は終わりだ。
わしの機嫌を損ねぬようにな」
ゆるゆるとではあるが、ミレーユが懸命に口と舌を動かし始める。
(これで終わりなら……)
奉仕のために手首の拘束は解かれている。
体力が回復すれば逃げる手段を見つけることができるかもしれなかった。
一縷の望みに賭け、ミレーユは屈辱を感情の奥へと追いやった。
「はぁ、ん……じゅぷ、ちゅぱ……ん、ふぁ、あ……」
「もっと舌を動かせ。袋のほうも舐めてもらおうか」
王の手が動き、ミレーユの頭をやや下に持っていく。
「く……!」
屈辱に歯を食いしばるミレーユだったが、
結局はおとなしくその部分に舌を伸ばした。
「う……あう……れろ、ぺろ……」
玉袋の下の部分は皮膚の色もにおいも濃くなっていて、
ミレーユのようなうぶな女には耐え難い。
だが王は頭をおさえつけ、しっかりとそこに舌を這わすように要求してくる。
「ん……はぁ、ん、ちゅぷ……れろ、んふ……はぁ、はむ……!」
舌で舐めるだけでなく、口を使って睾丸を口に含む。
口内でころころとそれを転がし、舌全体を使ってたっぷりとなめた。
「く……う、はぁ、はむ……ん、んぅ……ちゅ、はむ……」
ミレーユの白い頬が紅に染まっている。
それは恥ずかしさばかりでもない。
「よし。そろそろいいだろう」
言って、王が身体を離す。
「あ……はぁ、はぁ……」
(やっと……やっと開放された……)
肩で大きく息をしつつ、ミレーユは安堵感に脱力する。
(もう少しして……体力が少しでも回復すれば……)

「よし、ここまできちんと奉仕した褒美にわしの子種を注いでやろう」
「！？」
王がミレーユの背後からのしかかる。
力ずくでミレーユの身体を抑えつけ、隆起した肉茎を柔らかい尻に擦りつけた。
「そんな…約束が違う！」
「わしは王だ。性奴隷との約束を律儀に守る必要などない」
「あ……はぁ、いやあ、やぁ……！！」
「ハハハハ！　安心しろ。子を孕めば性奴隷から妾にすることも考えないではないぞ！」
王はひとり哄笑し、ペニスの狙いを定める。
ミレーユのそこは亀頭を咥えこもうと柔軟に広がり、王のモノを迎え入れる。
「あ――あ、はぁ、いやあああっ！！」
ずぬ、ずぶぶ――！
「ん、あ、やぁ……ぅう、くぅ……！」
ほどなくしてペニスが奥まで埋まった。
「あ、はぁ！　あ、や、あ！　く、ぅぁぁ！　はぁ、ああ！」
王はミレーユの最奥まで突き込む感触を楽しんでいる。
「うむ……わしが見込んだ通りのカラダだな……」
「あ、ひ……ちが、ぅ、あ！　いや、あ、はぁ！　ああ！」
王が奥まで突き込んでくるたびにミレーユの息が止まる。
おかげで満足に呼吸することもできず、喘ぎ声をあげ続けてしまう。
「こんな姉の姿を見たら弟はどう思うだろうな？」
「――！？」
ミレーユの脳裏に弟の姿が浮かんだ。
こんな自分の姿を弟に見られてしまったら――。
「おお……くお、締まる、締まるぞ……！！」
「ひ――あ、はぁ、いやあ！　や、あ……ぅ、くぅう！」
「弟に見られるのを想像するのがそんなに良いのか？　まったくいやらしい奴隷だ！」
「はぁ、ぁはあん！　いや……はぁ、そんな、ことは……あくっ、ぅう、くううん！」
新たなミレーユの泣き所を見つけて王はほくそ笑んだ。
もうこの女を手玉にとる方法は完ぺきにわかったとばかりに
がんがんと腰を押し出していく。
「フフフ……まったく哀れな姉弟よ……。弟のほうも、今頃は――」
「……！？　弟に……テリーに、何を……！」
「ん？　なに、そのうち会わせてやろう。
もっとも、姉のはしたない姿に失望してしまうかもしれんがな！」
「あぅ……く、はぁ、ああ……！」

ミレーユの膣内の締め付けが強くなり、それが王をますます喜ばせる。
「いやあ、ぁあ……はぁ、う、くう、んんう……！」
「こんな姿を弟に見られたくなければわしに忠誠を誓え」
「う……く、ぁ、はぅ……！」
様子を見て後ひと押しだと見た王は、卑怯な発言を繰り返す。
やっと手に入れた美しき奴隷。
その身体も心も思う存分蹂躙したいという欲望が渦巻いている。
ずぐ、じゅず、ずぶ――！
腰の動きも激しいまま、ミレーユを責め続けた。
「いや……あ、はぁ、いやぁ……う、あ……！」
度重なる責め苦と快楽。
その両方がないまぜになってミレーユを追い詰めていく。
突然王の口から出た“弟”の話など
疑ってかかるべきなのに、もう真実としか思えない――。
「さあ、どうする。わしに忠誠を誓うか？」
「く……う、はぁ、あ……」
王が一旦腰を止めた。
ミレーユに応える余裕を与えるべき、
腰をゆるくグラインドさせるだけになる。
「ぁ……はぁ、う……くう……」
「さあ、答えろ。王の“慈悲”が欲しいか、奴隷よ」
「あ……う……あ、はぅ……！」
ミレーユは首を縦に動かす。
「わしに忠誠を誓うか？」
「う……あ……」
「忠誠を誓うか？」
「は……い……」
「ククク……はーっはっはっはっはっはっは！！」
王は哄笑し、再び腰を動かし始めた。
「ならば性奴隷よ、忠誠の証に膣内射精をねだってみよ」
「！？」
「涕泣してねだるのだ。わしの子種がどうしても欲しい……とな！」
「あ、ひっ、いやあ、やあ……！」
「弟がどうなってもいいのか？」
「……ッ！！」

ガンディーノ王は人の弱みにつけこむことに関しては一流だった。容赦なくミレーユの心の聖地を踏み荒らし、女性としてもっとも屈辱的なセリフを言わせる。
「う……あ、はぁ……くぅ……あ、な、なかに……だし、て……」
「どうした？　聞こえぬぞ」
「なかに、出してくださ……い……」
「そこまで言われれば仕方あるまい」
王が再び激しく腰を動かす。
ずく、ずぶ、ごちゅ――！
亀頭をミレーユの子宮口に何度も何度も擦りつけ、締まりの良い膣襞で快感をむさぼる。
「わしに膣内射精されることは嬉しいだろう？　子種を注がれるのが喜びだろう？」
「う……くぅ……！」
「言え」
「王様に膣内射精されることが……、子種を注がれることが、わ、私の喜び、です……！」
（最低……！）
言わされたセリフだが、実際に口にすると本当に自分が変わってしまうようで怖い――。
「そうだ、それでいい。これからは心行くまで可愛がってやるぞ……！」
膣内でペニスがひとまわり大きく膨らんだ。
「あ……ああ、はぁ、あぅ、あ――！」
王がストロークを小刻みなものにし、膣奥に亀頭を密着させる。
「お……おおっ！」
「ひっ、あ、はぁ、あぅ……あああっ！」
びゅく、びゅる、びゅるるる――！」

「あ、ひぅ、い……やぁあ、いやああ、ああああぁぁぁぁぁぁっ！！」

「ふぅ……」
まだびくびくと震え、白濁を吐き出し続けているペニスの快感を意識しながら、ガンディーノ王は深くため息をついた。
「この調子ならもう一度いけるな」
「え！？　い、や……あ、はぁ……！」
ぐったりとして人形のようになったミレーユの身体を抱え直し、王が再び腰を動かし始める。
「まさに理想の奴隷だ。ずっとここで飼ってやろう」
王はミレーユの首筋に舌を這わせ、耳許でささやく。
「あ……ぁぁ……う……」
希望を失ってはいけない――そう思いつつも、ミレーユの心と身体はガンディーノ王に侵食されていく……。

女賢者編

覚えているのは怪鳥のいななき。
その瞬間、女賢者の身体は魔法の力で浮き上がり、
見知らぬ土地に飛ばされてしまった……。
「これがバシルーラってやつなのね……」
女賢者は立ち上がり、辺りを見回した。あたりは鬱蒼と木々が生い茂っている。
(近くに町があればいいんだけど)
連戦につぐ連戦で、もうMPも体力もほとんど残っていなかった。
傷つき、疲れ果てた身体をどこかで休めたい。
(じっとしていたらじきに夜が来てしまう……)
女賢者は周囲を警戒しながら歩き始める——。
——それから小一時間ほど経った頃だろうか。
賢者の前方に、三人の人影が現れる。
(たすかった……!)
男たちは三人パーティで、皆たくましい肉体をしている。
「どうしたんだ？　こんなところに一人で……」
「すみません、道に迷ってしまって……この辺りに町はありますか？」
「ああ、あるぜ」
「申し訳ありませんがそこまで——」
「わかった、連れて行ってやるよ。どうせ俺たちも行く途中だったからな」
「ありがとうございます！」
「ところでアンタ、賢者か？」
「はい。そうです」
「ほう……珍しいな。しかも女となると尚更だ。呪文もかなり使えるのか？」
「そうですね……ただ、今は少し疲れているので……」
賢者のその言葉を聞いて、男たちは目配せしあう。
だが、根がお人好しな賢者はその仕草に疑問を抱かなかった。
男たちに言われるがまま、賢者は森を歩く。
それから数時間——
賢者の疲労がピークに達しようかという頃、やっと目的地に着いた。
だが——そこは寂れた一軒家。
中に入ると拘束具や拷問器具のようなものが置いてある——。
「へへ……おとなしくしてもらおうか、女賢者さんよお」
「だましたわね！」
「若くて有能、おまけに美人な賢者様が俺たちみたいなクズの慰みものになる——
考えるだけでもそそるぜ」
賢者の体力が限界に達していることを悟り、
男たちは余裕の表情で襲いかかってくる！

戦いに敗れた女賢者――
「じゃあそろそろイカせてやるよ」
「い…いやぁっ！」
「賢い女もイクときはバカになるってもんだ」
（な…何これは…！ダメッ…！ああっ！そこはっ…！そこはッ！
「情けねぇなぁ　賢者サマ。
オレたちみたいなバカに騙されて……挙句の果てに身も心も奪われてなぁ」
「あっ！　ああっ！　あああっ！」
男「ほら…イッちまいな」

「う……く……」
朦朧とした意識が、数秒間かけてゆっくりと鮮明になる。
「あ……え……？」
目が覚めた賢者は、一瞬自分がどういう状況に置かれているのか全くわからなかった。
眼下に見えるのは自分の胸だけ――。
見回してみて、やっと特殊な拘束を施されていることに気づく。
（な……何なの、これ……！）
大きく分厚い壁に埋め込まれるような形で賢者は拘束されていた。
下半身は壁の向こうにあり、賢者自身からは全く見えない。
「く……ぁ、うう……！」
力をこめても壁はびくともしなかった。
完全に石壁のなかに身体が嵌めこまれてしまっているのだ。
しかも尻を突き出すような格好になっているのがわかる。
下着は剥ぎ取られ、空気が肌を撫でるのがわかった。
賢者は焦る。何しろ、抜け出す方法が一切わからない。
並の拘束具や錠前とは違うのだ。
壁そのものに嵌めこまれた胴体と手首は、
よほど強力な呪文でも使わない限り自由にならないだろう。
それに強力な呪文を使えばそれだけ自身に被害が出る可能性も大きくなる。
（こんな……ひどすぎる……！）
賢者はこの現実を絶望感と共に受け入れるほかなかった。
森のなかで出会った男たちは、拷問のプロだったのだ。
「おや？　おめざめかね、賢者さま」
「……！」
背後、壁の向こうから男の声がした。
「ククク……驚いたかい？」
「な……何のつもりですか、これは！」
「何って、そのままだよ。
賢者さまが絶対に逃げることができないよう、一工夫させてもらったのさ」
男の声は余裕と侮蔑に満ちていた。。

「賢者さまよ、一生俺たちに飼われる玩具になるというのなら、
優しく丁寧に可愛がってやるぜ」
「誰がそんなこと……！　あなた達には神罰が下りますよ……！」
「あぁ？　神罰だと？　へっ、こいつ、元は僧侶さまかよ」
「元僧侶の賢者か……エリート中のエリートじゃねえか。
それが俺たちみたいなのに捕まるとはね！」
「い、いい加減になさい！　きっと仲間たちが、私を助けに……」
壁の向こうは賢者からは見えない。
けれど、自分が男たちに恥ずかしい格好をさらしてしまっていることはわかった。
「さあ、賢者さまよ。たっぷり可愛がってやるぜ。まずはどうされたい？」
「……」
男たちは楽しげにバカ笑いしながら、時折賢者の尻をなで、また太股を撫でた。
脇腹にも手を這わせて性感を徐々に刺激していく。
「う……あ、はぁ、あ……」
男たちの手は探るように強弱をつけた刺激を賢者に与え、反応をうかがった。
「は、ひ……ん、はぅ、ぅう……！」
そのうちに、賢者が弱い刺激に反応しやすいことに気付いた。
「んは……あ、はぁ、やぁ……！」
ぴくぴくと賢者の下半身が震え、とろりとした愛液が滲み出してくる。
「何だ、これは？　とんだ淫乱賢者さまだな」
男が秘所に指をやり、分泌された愛液をすくいとった。
それをそのまま賢者の尻になすりつける。
べっとりとついた透明な筋は、賢者の隠された淫欲を象徴しているかのようだった。
「おっと、どんどん溢れてくるな」
「いや……あ、はぁ、んぅ……！」
男に言葉で揶揄され、行為で恥辱を味わうたびに、賢者の濡れは激しくなっていく。
程なくして指を動かせばぐちゅぐちゅと淫らな水音が鳴るほどになった。
「ククク……なんだこの音は？」
「う……はぁ、あ……ちが、ぅ……あ、はぁ、ああ……っ！」
いくら言葉で否定しても賢者が感じているのは明らかだった。
自身もそれを感じ、どうしようもなく濡れてしまう自分を心の底から恥じる。
「あ、はぁ、ああ……く、いやああっ！」
だが、壁に埋め込まれて微動だにしない身体を隠すことはできず、
男たちの視線のもとに下半身を晒し続けるほかない。
「くぅ……はぁ、あ、ぅあ……！」
指が触れ、手が撫でるたびに賢者はあられもない声をあげてしまう。
いくら努力しても声を我慢できないことも大きな屈辱だった。

「とっておきのものをやろう」
かちゃかちゃと薬瓶が運び込まれる音がし、ほどなくして賢者の股間に冷たいものが触れた。
「ひぅ――！」
冷たさと共に、独特の毛羽立った感覚が伝わってくる。
（筆……？）
股間にどんどん冷たさが伝わってきて、
賢者はようやく筆で薬を塗りつけられていることに気づいた。
「な、なにを塗っているの！？」
「さあ、何だろうな？」
「やめなさ……ぅ、い、あはぁ、ああ……！」
（な、何……何なの！？）
股間から熱い感覚が広がり、身体全体をおかしていく。
「うく……はぁ、ああ、やぁ……！」
いつしか股間にあった冷たさはなくなり、熱さへと変化していた。
筆が動くたびに身体全体が震え、どっと汗が吹き出してくる。
（興奮剤……！）
動悸もどくどくと激しくなっていき、頭にも血がのぼる。
全ての感覚が鋭敏に、そしてオーブンになって、神経が擦り切れてしまいそうだった。
「うあ……はぁ……ぅ、やあ、いやぁ……！」
何もしていないのに息が切れて、頭がぼうっとする。
「ひ、あ、はぁ！」
おまけに男の手が身体に触れると、その部分に引きつるような快感が走るのだ。
（おかしくなってる……！）
男たちはまだ執拗に筆を動かし、賢者の股間に薬を塗りこみ続けた。
けれどもう当初のような液体の冷たさは全く感じない。
賢者の身体は完全に高ぶっている。
「う……くぅ……ん、ふぁ……はぁ……」
息も荒く、筆が動くたびに全身に快感が走った。
背筋を快楽の電気信号が駆け上がり、何度も何度も身体が震えてしまう。
（どうして……こんなに……！）
下半身は賢者自身の目には見えず、何をされているのかは厳密にはわからない。
ただ何かの薬を塗られたこと、繰り返し愛撫されていること、それだけが今の賢者の感覚だった。
男たちが今何をしているのか、次に何をしてくるのかがわからない。
怖い反面どこかで期待してしまってもいる――。
自分でもよくわからない感情に侵され、賢者は戸惑う。
だが、確実にマゾの性感が芽生えようとしていた。

興奮はずっと高まってきている。
そのさなか、股間にべっとりと温かい湿り気が張り付いた。
「！？」
それは男の舌の感触だった。
「な、なにを……！　いや、やあ、やめてぇ！」
必死に嫌悪の声をあげる賢者を見て、男たちは薄笑いを浮かべた。
男の舌が再びべったりと張り付き、賢者の秘所を舐め上げる。
「ひ……！　う、はぁう……！」
賢者はその感覚に全身をふるわせた。
なまあたたかく柔らかい、けれどどこか芯のある舌の感触。
それは賢者の陰唇だけでなく、クリトリスをも舐め上げる。
「あひ！？　いや、やあ……！」
思う存分舌を伸ばし、賢者の青い性を蹂躙する。
まだ男慣れしていないそこは硬く、
ときに舌での愛撫すら拒否した。
だが時間をかけてゆっくりと慣らしていくと、
徐々に徐々に淫らな本領を発揮する。

「入り口が舌に吸いついてきやがる」
「……ッ！！」
男の言葉はけしてウソではなかった。
膣口を舌でいじると、膣襞のほうが奥へ奥へと舌を迎え入れようと蠕動するのだ。
「賢者さまのカラダは正直なようだ」
男は舌を伸ばし、膣襞の動きに任せるままにした。
「ひ……あ、はぁ、ああ……！」
案の定、賢者がひとりでにあられもない声をあげはじめる。
自身でも膣が異物を求めていることを実感したのだろう。
頬がますます紅に染まり、男たちの情欲をかきたてた。
「さあ、次は何をして欲しい？　いまならたっぷりとサービスしてやるぜ……」
「く……ぅ、うう……！」
賢者は男たちの言葉に反応できず、ただいやいやと首を左右に振った。
男たちからはその仕草は見えない。
都合よく解釈すれば、尻を振ってもっと刺激をねだっているようにすら見えた。
「仕方のない賢者さまだ」
男は言って、再び賢者の股間に顔を近づける。
舌を突き出して膣内を舌先で刺激しながら、クリトリスにも手を伸ばした。
「あ――ひ、ぅあ、ああああぁぁぁっ！！」
二点同時責めを受け、すぐにあられもない声があがる。
「軽くイッたか？」
別の男の楽しむような声。
「ひぅ……く、はぁ、はぁ、ああ……！」
賢者はまたがくがくと全身を震わせた。
愛液が大量にあふれでてきて男の舌を濡らす――。
「遠慮することはない。もっとイッてしまえ」
「ひあ、はぁ、ああああぁぁぁ……！」
男の舌の動きは巧みだった。
一度高ぶった性感を下ろしてしまうことなく、執拗に愛撫し続ける。
「うあ、あ……いや、いやあ、いやいやいやああ！！」
どれだけ叫んだところで賢者の身体の自由は奪われたまま――。
屈辱と絶望を味わう胎内で、快感がどんどん大きく大きく膨れ上がっていく。
（こんな……顔も見えないのに、下半身だけおもちゃみたいに扱われるなんて……！）

表情を見られていないことはひとつの救いでもあった。
「ひ……はぁ、あ、や、あ……ぅ、くうう！」
男たちに見られていない安堵感から、賢者の表情が快感にはしたなくゆがむ。
「ぅあ……はぁ、ああ、い……ぅ、あああぁぁあっ！」
最初の小さな絶頂――。
膣内に舌を挿しこまれ、クリトリスを指先ではじかれて賢者は絶頂に達した。
「ひぅ……く……はぁ、あ……はぁ、ああ……っ」
賢者の下半身が今まででもっとも盛大に震えた。
繰り返し繰り返し背筋が反り、愛液が大量にふきだす。
「ぅ……こ、こんなこと、絶対に、ゆるさな……い、はぁ、ぅぅ……！」
言葉の内容とは裏腹に、口調にはどうしようもないほどの甘さが香る。
どうせ顔は誰にも見られていないという安心感も、より賢者を乱れさせた。
男たちが再び愛撫を再開する。
膣内にゆっくりと指を出し入れし、にちゃにちゃと淫らな水音を立てた。
「こんなに濡らしておいて、それでも自分は淫乱じゃないって言い張るのか？」
「く……ぅ、は、あ……ひぅ……！」
男の指が動くたびに賢者の尻がふるふると動く。
脚もがくがくと震え、感じているのがまるわかりだった。
頬が熱い。どんどん体温が上昇している気がした。
賢者の肌はうっすらと汗ばみ、独特の光沢を放つ。
くちゅ、にちゅ、じゅぷ――。
「この音も聞こえてるんだろ？」
「ぅ……あ……く、ぅぅ……！」
男が指を激しく動かす。水音がじゅぷじゅぷと激しいものに変わり――
「あ、ひっ、ぅああ、ああ、はぁあん！」
賢者の嬌声もより高くなる。
男が中指を思い切り賢者の膣内に挿入し、
指先を時折曲げながら膣襞を激しく擦り上げる。
中指を伝って大量の愛液がふきだし、太股までしとどに濡らす。
「ひっ、あ、はぁ、い……ん、くぅ、んぅぅぅぅ！」
びくん、と賢者の下半身が跳ねた。
「あ……ああ、はぁ、あああああぁぁっ！！」
男の指に蹂躙されるがまま、再度絶頂に達した。
濡れそぼった膣口は男の指に吸いつき、更に愛液を垂れ流す。

「じゃあ俺が一番だな」
ほどなくして"順番"が決まり、男たちのうちの一人が全裸になった。
「え……？」
（まさか……この体勢で、このまま……！？）
「ひ……いやあ、ああ、やめ……く、ぅあああっ！！」
拘束されてただでさえ苦しい姿勢なのに、背後から男に突き入れられる。
「ふぁ……はぁ、いやあ……あ、ぬ、ぬいて……！　ぬいてぇ！」
必死に訴えかけるが男の抽挿は止まらなかった。
ほとんど動けず、なすすべもなく受け入れるほかない。
「う……くぅ……ぁ、はぁ、あ……！」
冷たい壁に埋め込まれてるせいか、ペニスの熱さを痛いほどに感じた。
火かき棒のようなそれが膣襞をこすり、
じっくりと膣内の感覚を味わうかのように動く。
「あ……はぁ、あぅ……く」
後ろが見えず、何が起こっているのかわからないこの状況では
賢者は下半身に集中するほかない。
（ダメ……感じすぎる……！　神経がおなかの奥にばっかり行ってしまって……！）
男たちがいる壁の向こう側で何が起こるか、何をされるのか予測できない。
恐怖心が、防衛本能が快感をさらに加速させる。
「ったく、すごい濡れ方だぜ。自分でもわかるだろ？」
「あ……はぁ、いや、やあ……！　言わないで……ん、はぁ、ああ……！」
愛液がどんどん分泌され、太股から膝、ふくらはぎを通って足首にまで垂れている。
男が腰を動かすたびにぐちゅぐちゅとはしたない音が鳴り、
あふれだした愛液はぱたぱたと床にも垂れて跡を残す。
「ちと濡れすぎな気もするが……
まあ、締まりがきついからこれくらいでちょうどイイな」
男は冷笑し、パシンと賢者の尻をひとつ叩いた。
「はぁん！」
「俺たちに使われるのがそんなに嬉しいのか？　嬉しそうに食いついてきやがって」
「ち、ちが……ぅ、はぁ、あ……あなたたちは、絶対にゆるさな……い、はぁ！」
「許さないっつったってなぁ？　この状況でどうするつもりだよ」
「なかま……仲間がきっと、たすけ、に……！」
「ハハハ！　魔王討伐に忙しい勇者様ご一行がこんな辺境にまでくるかよ！」
「く……ぅ、ぅう、あ、ひ……ぅあ、ああ、はぁん！」

言葉で賢者を責めるたびに、膣内の締め付けがぎゅっと強くなる。
「残念だったな。修行を積んで転職までして、この有様とはな」
「う……く、あ、は……！　きっと……た、たすけ、が……」
賢者が拒否に激しく身を震わせ、なんとか壁から抜けだそうと力をこめる。
「くう……ぅ、あ、ぐ……ん、はぁ、はぁ……っ！」
だが少々のことではやはり壁はビクともしない。
「あ……はぁ、大き、い……ぅ、くぅ、あぁ……」
男はわざと動きをゆっくりにし、できるだけ快楽を引き伸ばそうとする。
それに合わせて賢者の膣襞は程良く収縮し、ペニスを優しく締め付けた。
「さて……後ろも詰まってることだし、そろそろ出すか」
「え――」
男が腰を入れ直し、徐々に激しいストロークに移行する。
「あ、ひ、や！　ああっ！　ぅあ……だ、だめ……！」
「ああ？　何がダメなんだ。こんなに締め付けやがって」
「ひ……ぅ、ああ、はぁ……！　いやあ、あ……く、ぅう！」
「なかで出すぞ……ッ」
「――！？　や、まって！　そ、それだけ、は……あぁ、はぁ、ぅああ！」
ついに男の腰の動きがシンプルで小刻みなものになる。
「あ……や、だめぇ！　いや、あ……あ、大きく、なってる――！」
びゅく、びゅるる、びゅぶ――！

「あ――ひ、あああああああああああああっ！！」

賢者にははっきりとわかった。
膣内で男のものがぐっと膨張し、根元から登ってきたものが裏筋を脈打たせ、
ついで熱いそれが最奥でぶちまけられる過程が。
じわり、と下腹の奥で熱さが広がる。
べとべとに粘るそれが自分の膣内に張り付いている――。
「う……あ、はぁ、あ……！」
膣内を汚される屈辱が賢者を打ちのめす。
「く……ぅあ……あ、はぅ、んぅ……！」
（仲間が……きっと……助けに……）
賢者は一縷の希望にすがり、何とか正気を保つ。
だが――壁に埋め込まれた自分を意識すると、
絶望がゆっくりと精神に侵食してくる……。

ルイーダ編

宿屋の売り上げを狙って
侵入してきた強盗と
抗戦するも
力及ばず押さえつけられてしまう。

「思ったよりはてこずったが、所詮は女だな」
「そのくらいの腕でオレたちに立ち向かおうなんて甘いぜ？」
「は…はなしなさい！　ケダモノ！」

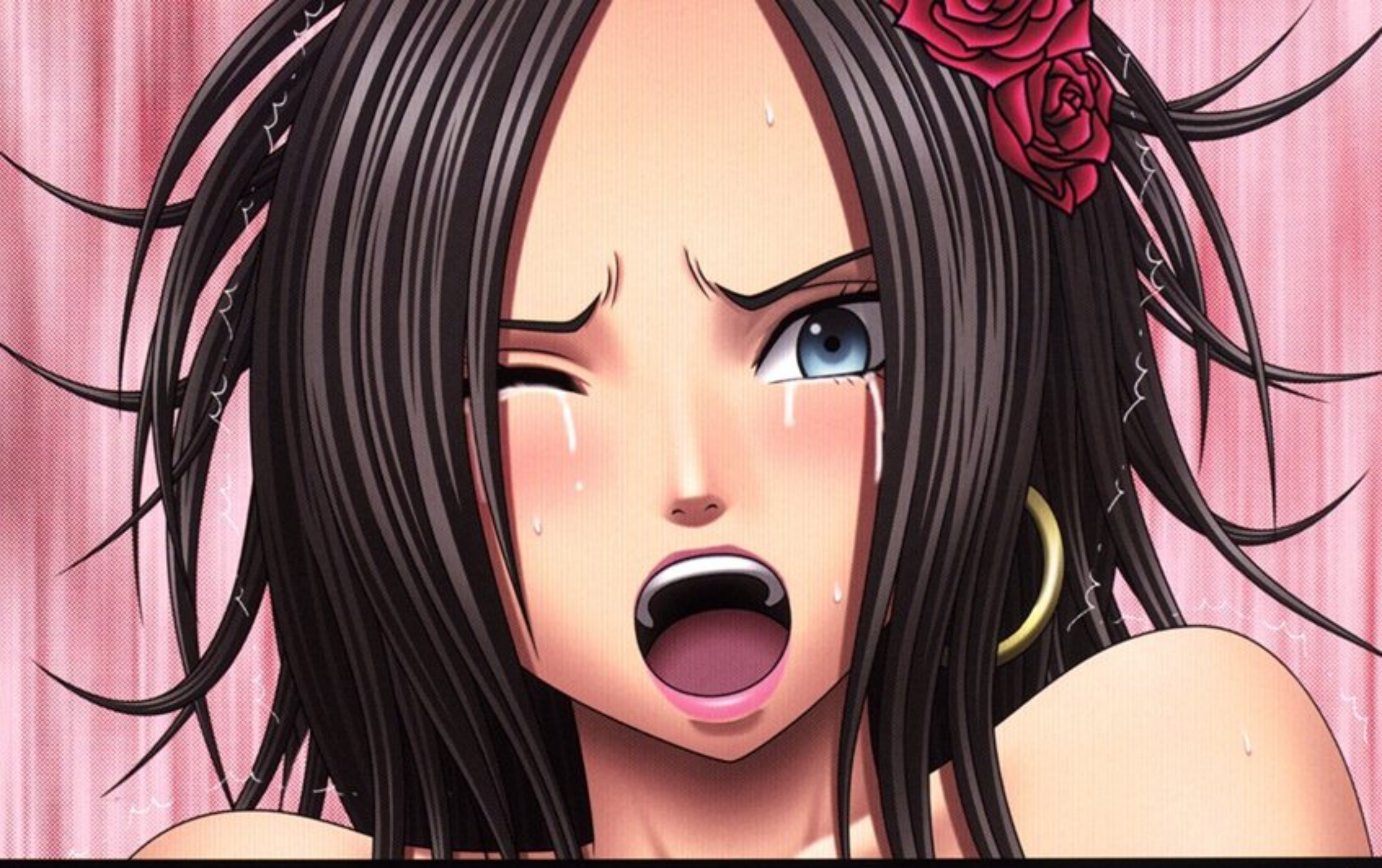
「そろそろ入れさせてもらおうか」
「！？」
男たちがルイーダの身体を持ち上げ、宿のカウンター机に押し付ける。
「や……く、いや……っ！」
有無を言わせない強い力で手首をおさえ、
自分たちの圧倒的な優位を誇示する。
「何度言わせるんだ。大人しくしやがれ！」
「う……あぁ……！」
ルイーダののどから苦しそうな声が漏れるのを全く意に介さず、
男たちは挿入の姿勢をとった。
「く、ぅう……あ、あああっ！」
がっしりと全身でもってルイーダをおさえつけ、
動かないようにしてからペニスを秘所に押し当てる。
「抵抗してもムダだ。へへ……堪能させてもらうぜ！」
「あ……く、ぅあああ！！」
男が腰を前に押し進める。
まだそれほど濡れていないそこは、男の亀頭に摩擦してひきつった。
だが男は気にせずに無理矢理ペニスを押し付け、
ぐいぐいと陰唇を巻き込みながら酷な挿入をする。
「い……っ、く、ぅう……！」
　きちきちと強く締め付けてくる膣肉を強引に割り開き、
男のペニスがルイーダのなかに埋まっていく。
「あぅ——く、はぁ、はぅ……んぅ……あああっ！」
ずぶ、ずぬぬ——。
三十秒ほどかけてやっと男のものが全てルイーダの膣内に埋まった。
生理的な反応で、異物を感知した膣襞がどっと愛液をあふれさせる。
「ふぅ……」
「う……あ、く……」

程なくしてルイーダの膣内は愛液で十分に濡れ、男を受け入れる態勢が整う。
「いい濡れっぷりじゃねえか。俺のがそんなにいいのか？」
「ちが、ぅ……あ、はぁ、ああ……！」
男のものはかなり大きい。ルイーダの膣内は強く圧迫され、息をすることすら苦しいほどだった。
おまけにカウンターにしっかりと押さえつけられて楽な姿勢になることもできない。
ただひたすらに男を喜ばせる姿勢のまま、挿入を受け入れるほかない。
「うく……ん、はぁ、うう……！」
「おら、我慢せずに声出してみろよ」
「う……ぅ、はぅ……ん、ん……っ」
なんとか口を閉じ、せめて声はあげまいとしているルイーダを、別の男が苛立たしそうに見る。
「強情なアマだ」
「ん、ふ、んんぅ？！」
横からルイーダの唇を奪い、舌で口内を蹂躙した。
「ふぁ……はぁ、はむ……ん、ちゅ、ふぁ、あぅ……！」
膣内を縦横無尽に力強く突かれながら、口内までも舌に犯される。
男の生臭い唾液を口のなかに流し込まれた。
「んふ……ん、くぅ……ん……んく、ぷは、はぁ……！」
おまけにそれを嚥下するまで唇を離してもらえず、おもわず飲み込んでしまう――。
（最低……っ）
喉を通っていく男の唾液。その生暖かいねばりは屈辱でしかなかった。
「く……ふぁ、ああ……」
けれど――そうして屈辱を感じ、男にいいようにされるにつれて身体の奥にある熱が高ぶる。
膣内もうねり、最初は男を拒否するかのように強く締め付けていただけだったのが、
今はもう優しく包むような動きもし始める。
「はぅ……あ、ひぅ……く、ぅう、ああ……！」
男にやっと唇を解放されてももう一度火のついた身体は止まらなかった。
胸をもみしだかれ、好きなように膣奥を突かれる。
「ああ、ひ、あ、はぁ、ああ……！　くぅ、ん、はぁ……！」
あられもない声をあげてもだえてしまうルイーダ。
その姿からは徐々に気丈な女主人としてのものが抜けてきている。
（こんなやつら相手に……どうして……！）
自分で自分の身体の反応が不快だったし、不可解でもあった。
けれど、奥を突かれ、身体全体を揺すられると頭のなかで白い光がはじけてしまう。
「ふぁ、ああ、ひ――あああああっ！」
レイプされながら初めての軽い絶頂に達し、ルイーダの身体はびくびくと切なげに震えた。

デボラ編

ガシャーン！
――深夜。窓のガラスが割れる盛大な音が響いた。
「何よ、うるさいわねえ」
まだ起きていたデボラは怪訝な顔で階下の様子をうかがう。
ドタドタと複数の足音。怒号のような声も聞こえた。
「何なのよ、まったく！」
デボラは苛立たしげに立ち上がり、脇にたてかけてあった武器をとった。
バタン！
それと同時にデボラの部屋の扉が勢いよく開く。
「……？」
「デボラ！　今日こそおまえに引導を渡しにきたぞ！」
威勢のいい啖呵と共に男たちが部屋になだれこむ。
「うるさいわねえ……何者なのよ、まったく……」
どこかで見覚えのある男たちだったが、いまいち思い出せない。
デボラがけだるげに言うと、
男たちは一気に顔を赤くしてますます憤慨する。
「も、もう忘れたのか！？
おまえの気まぐれで解雇された、この屋敷の元使用人だ！」
「俺たちは、おまえのあの一言のせいで職を奪われ、家族を養うことも――」
「あーもう、うるさい！
そろそろ寝ようと思ってたとこなの、明日にしてくれる？」
男達の憤慨に、デボラはめんどうくさげに言って手をひらひらと振る。
あからさまな、男たちのことなどどうでもいいという態度。
「もう我慢ならねえ！」
「え？」
男たちはそれぞれ武器を取り出して、部屋の入り口を固めた。
「ちょっと、何なのよ」
「フン……警備の奴らも俺たちの味方だ。
みんなお前のわがままに頭きてるんだよ！
今日こそ今までのツケを払ってもらうぞ！」
「何寝ぼけたこと言ってんのよ。こ
の私をあんた達みたいな使用人風情がどうにかできるわけないでしょ？」
デボラはやや緊張しつつもまだ憎まれ口を叩き、武器を構える。
「……やれるものならやってみなさいよ」
「かかれ！」
男たちが束になってデボラに飛び掛かる――。

「う……は、離しなさいよ……！」
男たちはデボラの手足を拘束し、無理矢理開脚させた。
「へへ……恥ずかしいか？　デボラ“お嬢様”」
勝利の余韻と抜群の肉体を前にして、
男たちの興奮はもはや十分に高まっていた。
デボラが動けないのをいいことに、
皆それぞれ手をのばし、その柔肌に触れる。
「ぁ……ん、さ、さわるな！」
ひとりが股間に手を伸ばし、下着ごしにデボラの秘所に触れた。
「ふむ。さすがにまだ反応はないみたいですね」
デボラのそこは今の心理状態をあらわすかのように
びっちりと閉じていて、湿り気もない。
男はこれみよがしに舌を出し、デボラの股間にたっぷりと唾液をつけた。
「……っ！？」
下着も秘所も舌でべとべとにしながらゆっくりと丁寧に舐める。
「な……何してるのよ！」
「ん？　クンニだよ、クンニ」
舌先で秘所をこすりあげ、
びっちりと閉じている陰唇をゆっくりとこじあける。
「あ……は、ぅう……っ！」
全身を触った反応からも、
デボラが意外にうぶなことが伝わってきていた。
「デボラお嬢様、あんたもしかして……処女だったのか？」
「……だったら、何よ……」
「マジか？　じゃあ男にこんな風にされるのも初めてってことかよ！
最高じゃねえか」
「く……っ。う、あ……」
男たちの手と舌の動きがエスカレートし始めた。
新雪を踏み荒らす子どものように、
われ先にとデボラの柔肌に陵辱の痕を残す。
「何か理由でもあるんですかね、お嬢様？
今まで男を寄せ付けず、処女でいたわけは？」
「……私に見合う男がいなかっただけよ」
「ハハハ！　そりゃ残念でしたね！
俺たちみたいな下賤のものに奪われちまって！」
秘所をいじりながらズボンを下ろし、男は自分の陰部を露出させた。
ぎちぎちに隆起しているそれをデボラの秘所に押し付ける。



「そ、その粗末で汚いものをしまいなさい……今すぐ！」
「そういうわけにはいきませんねぇ」
男はニヤニヤと笑いながらデボラの秘所に亀頭を押し付ける。
見せ付けるように何度も何度も上下させ、デボラの愛液で徐々に濡らしていった。
「う……あ、う、く……いや！　離しなさいよ！」
男が狙いを定めて腰を前に進めようとするとデボラは激しく暴れた。
だが周囲にいる男たちがそれを押さえ込み、体勢を固定する。
「大人しくしてくださいよ。悪いようにはしませんからね」
会心の笑みを浮かべつつ男は腰をグラインドさせた。
「あ……！　ぁ、く、ぅあ……！　はぁ、んんぅ！！」
ゆっくり、ゆっくりとペニスがデボラのなかへと埋まっていく。
唾液と愛液でベトベトになり、
十分ほぐされた膣口は意外なほど柔軟に男を受け入れた。
「くぁ……痛っ、うう……！」
「ハハハハ！　あのデボラお嬢様が、もだえてらっしゃるぜ！」
「ち、ちが……ぅ、あ、はぁ、あぅ……！」
興奮さめやらず、男はすぐにピストンを開始した。
優しさのかけらもない激しい動きでデボラのなかを突きまくる。
「う……はぁ、あ……くぅ！　こ、こんなの、何ともないわ……！」
「フン……た、大したことないじゃない！こんなことで私が屈したと思ってる、の？」
力任せに男が腰を動かすと、それに合わせてデボラの身体が揺れる。
それでも目の前の男をにらんでなおも口で反抗した。
「私に復讐するのにこんな手段しか思い浮かばないなんて……
だから、あなたたちは……く、ぅ……使用人のまま、なのよ……！」
「こりゃありがたいご忠告で！」
デボラの口撃は全く気にすることなく男は自らの好きなように腰を揺すった。
まだ硬く、締め付けの強い独特の感触を思う存分に楽しむ。
「へへ……さすがお嬢様、ここの具合も下々の女とは違いますね。
最高にいい気分ですよ。ハハハ！」
「く……ぅ、は……わたしは……最低の気分よ……っ！」
搾り出すような声。
全身に力をこめて男を拒否しようとするが、
押さえつけられて不自由な体勢をとらされているせいでどうにもならない。
「うく……はぁ、あ……ぅ……ん、く……！」
（苦しいけど……こんな奴らには絶対負けないんだから……！）

「おお、お嬢様のその悔しそうな顔を見ていたら、もう出ちまいそうですよ」
「う……く、あ……な、何を……！」
「このまま膣内に出しても構いませんよね？」
「……！！」
男の宣告にデボラの膣内がぎゅっと強く締まった。
それは心底からの拒否。
だが、今の状態では男を喜ばすことにしかならない。
「へへ……どうせもう俺たちは終わりなんだ……。この機会を逃すかよ！」
「あ、ひ、ああ……く、ぅあ、やあ！」
男は自らデボラを押さえつけ、容赦なく腰を打ち付ける。
最奥に向かって何度も何度もピストンを重ね、自分勝手な快楽を貪った。
「はぅ……く、ぅう、やめ……はぁ、あ……く、ぅあぁっ！」
だがその身勝手なはずの快楽が、いつしかデボラにも伝染していく。
膣奥を何度も突かれるうちに頭のなかが徐々に白い光でいっぱいになる――。
「うお……また締まって……イキそうなのか？」
「くぅ……う、あ……はぁ……！　こ、この屈辱、忘れない、わ……！
あとでひどいめにあわせて……く、おもいしらせて……あげ、る、ぅ、んんぅ！」
「楽しみにしとくぜ！」
男の動きが小刻みになる。
ラストスパートに入り、更に激しくデボラの身体ががくがくと揺れた。
コツコツと子宮の入り口をノックされ、まだ未開発なそこがわずかに開く――。
「ぁあ、はぁ、ん、あ……！　ひぅ、ん、くぅん！　や、あ……」
「おお！」

「ひ――ん、ふぁ、ああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

びゅく、どぷ、びゅぷ――！
溜まりにたまった熱い精がデボラの奥で弾けた。
男は獣欲に衝き動かされるまま、精液を放出しながらなおもピストンを続ける。
「はぁ、あ、あぅ……ぅ、あああ、いやぁ！」
男はデボラの身体に覆いかぶさり、
完全に拘束したまま射精が終わるまで腰を動かし続けた。
「う……はぁ、あ……ん、はぁ、はぁ……」
苦しげに息をするデボラに男がにやりと笑いかける。
「何よ……っ。こんなことくらいじゃ、私はへこたれないわ……」
「ほう、そうですかね。ではひとつ根くらべと行きましょうか……っと」
男が下品な声を出しながらペニスを抜く。　結合部から大量の精液が滴り落ちた。
そして次の男がまたデボラの膝をつかみ、股をこじあけた――」。

ムーンブルクの王女編

「……く、はぁ、ああ……！」
男たちが王女を床に押さえつけた。
「ふぅ……さすがにロトの血はあなどれんな。だが……まだまだ未熟だ」
「あぅ……はぁ、あ……」
王女は疲れ果てて激しく息を突く。
限界まで精神力を使い、呪文を詠唱し続けた代償だった。
「さて、お楽しみの時間といこうか」
男たちは半裸になり、おさえつけられて動けない王女の身体に手を伸ばす。
「や、あ……いやあ！」
「へへへ……これが王女様の肌の感触か。たまらないねえ」
「まさかこんな役得にありつけるとはな。まったくハーゴンさまさまだぜ」
「う、あ……はぁ、ん、ああ……！」
「おまけに処女だろう？　王女様の破瓜の瞬間を見られるなんて最高だ、ゲハハハ！」
男たちは下品に笑いあい、王女の身体を撫で回す。
若く育ちのいい娘独特の張り、硬いほどの弾力。
そしてすべすべな手触り、どこか乳臭い甘い香り。
魔の力を手に入れて以来、好き放題に女を犯してきた彼らでも、
王女の肉体には今までにないほどの興奮を覚えた。

「いや……あ、はぁ、ぅう……！」
(こんな辱めを受けるなんて……！)
王女の首には皮製の首輪が巻かれている。
メス犬におあつらえのものとして、男たちが城内からわざわざもってきたのだ。
「おら、犬なら犬らしく鳴いてみせろよ！」
バックの体勢になり、王女の秘所にペニスを押し当てる。
「これが何かわかるか？」
「え――」
「ククク……人間様のチ○ポだ。
メス犬にくれてやるのは惜しいが、たっぷり楽しませてやるよ」
「ひあ……！　は、ぅ……あ、痛っ、あああぁぁぁっ！」
“メス犬の姿勢”で王女の処女が破られる――。
ずぶ、ずぬぬ……！
たっぷりと時間をかけて男はペニスを挿入していく。
「へへ、ロトの血を俺たち下戦の血で犯してやるよ……！」
そして王女の奥に到達すると、今度は勢いよく腰を叩きつけ始めた。
「お……おお」
しばらくした後、男の背筋が突然ぶるりと震えた。
唐突に訪れた射精の予感。
「お、イク――」
「え……？」
更にペニスがひとまわり大きく膨らみ、膣内でびくびくと跳ねた。
「あ、ひ――！？」
びゅる、びゅぶ、ぶびゅ――！
「いや、あああ、いやあああぁぁぁっ！！」
身体の奥に今まで感じたことのない熱さが広がった。
それは膣奥と子宮口にべったりと張り付いて広がり、その奥にまで侵入してくる。
「あ、ぅ……はぁ、あ……あぁぁ……」
乱暴に跳ねるペニスを男は最後の瞬間まで奥に突き入れていた。
完全に身体を汚された屈辱と無力感に王女は打ちひしがれる――。
「おっと……休んでる暇はないぞ」
次の男がいきり立ったものを王女の頬に押し付けた。
「このなかの誰がロトの血を引く子の父親になるんだろうな？」
「あ……や、いや、ああ……」
男はあえて王女の姿勢を変えず、バックの体勢をとらせたまま挿入した。
「メス犬の自覚が芽生えるまで犯しぬいてやるぜ……ハハハハ！！」
男の哄笑と王女のすすり泣きが魔物の狩場と化した城内に響く――。

この本は同人ソフト「ＤＱディザイア」の
ＣＧを収録したものです。
デボラとムーンブルクの王女を描いたのは
今回が初めてです。
あとリクエストがとても多かった
ガンディーノ王×ミレーユもついに描けました。
個人的にはルイーダ編の絵が気に入っています。

２０１１年　３月１０日発行

ＤＱディザイア
フルカラー同人誌版

発行／クリムゾン
http://www.alles.or.jp/~uir

印刷／大陽出版株式会社

…!
やっ…やめっ！
おっと…じゃじゃ馬王女様は
ビクッ
チル
チル
チル
チル
あッ!!
はぁッ!
好奇心から　城を1人飛び出したアリーナは
郊外で人攫いの集団に遭遇してしまう。
いやらしい貴族たちに目をつけられたゼシカは
透明の箱に触手生物と一緒に入れられて見世物にされる。
結婚直前、ビアンカはフローラの送り込んだ性の
プロたちの手で淫乱なメスに変えられてしまう。
ああ……マーニャちゃんのここおいしいよ……
あなたたち……こんなことしてただで済むとは……
はぁ!!
ビクッ
夜道、今までふってきたファンたちに囲まれたマーニャは
手足を固められて男たちのオモチャにされてしまう。
ガンディーノ王に再び捕まってしまったミレーユは
城内の秘密の風呂場でイヤというほど奉仕をさせられる。
ビクッビクッ
城を襲撃された
ムーンブルクの王女はメス犬同然に扱われる。
今までデボラにさんざんこき使われて
解雇された使用人たちが復讐しにやってくる。
あッ!!
バシルーラで1人見知らぬ地に飛ばされてしまった女賢者は
ならずもののパーティに道案内してもらうが、
騙されて調教部屋に連れ込まれてしまう。